

契丹の開化

太祖の業

遼の勃興 これよりさき、北方に遼といふ強國がおこつた。この國をたてた契丹〔今の蒙古〕は、もと潢河〔今の内モンゴルのシラムレン河〕のほとりに住んでゐた未開野蠻の種族で、はじめは、文字もなく、貨幣の制もなかつた。しかるに、五代のはじめに、耶律阿保機といふものが、その諸部を一統し、一五七六年〔醍醐天皇の醍醐代〕帝位に即き、太祖となるに及んで、東鄰の渤海國、その他の近鄰諸族を従へて、大いに領土をひろめ、またしきりに支那の文化をとり入れ、且、契丹文字を製しなどして、その文化をも進めた。かくして、だんだん盛んになつた契丹は、太祖の子太宗に至つて、國勢が一層加はり、遂に後晉をほろぼし、國號をたてて、遼と稱した。

◇太祖の后 太祖の后述律氏は、人となり、勇決果斷で、權略に富み、男まさりの婦人で



契丹丹牌

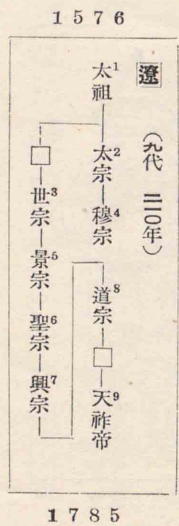
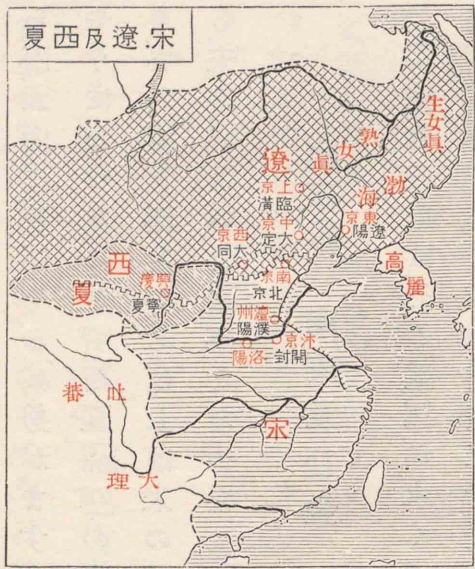
契丹銀牌

銀牌は、兵馬發給等の緊急事件ある時、使者がこれを頸にかけて、馬をさばす。牌中の字は、契丹文字の略である。また長牌は、物資發給等の時、使者がこれを腰におびて、馬を走らす。牌中の字は、契丹文字の救走馬である。

あつた。太祖が契丹の諸部を一統した時も、またその諸方に兵を用ひた時も、つねに相談相手となつたものは后であつた。かくして、契丹の國基を定めることに大功のあつた后は、太祖の死後、丈夫も及ばぬ勇斷を以て、諸將をおそれ服させ、幼帝太宗を助けて、國勢をますます盛んならしめた。

遼の全盛と西夏の建國 遼は、太宗

の後、三代をへて、聖宗〔宋の太宗・眞の



世になると、その國が、ますます榮えて、しきりに宋を侵し、一六〇四年〔宋の眞宗の世〕、遂に多額の歳幣を約束させ、またさきに新羅に代つて、朝鮮半島を一統した高麗を攻めて、臣と稱させた。これで、遼の版圖は、東、日本海か

この頃藤原道長權を専らにす

聖宗の南伐

聖宗の東略

遼の大版圖

西夏

ら、西天山に及び、その威勢がますます宋を壓するやうになつた。この頃、西夏〔甘肅〕の李元昊〔チベット族の別種〕も、また帝と稱して、しばしば宋の西邊を侵したから、宋はいよいよ多事となつた。



幣貨の夏西

錢文は、西夏文字の大安寶錢で、上より右へ、右より下へ、下より左へ、左より大は、西夏の年號である。

第五章 南宋及び金 宋の文化

女真起る

金の勃興

遼は、その盛運が永くはつづかず、宋とともにしだいに衰へた。たまたま滿洲松花江附近の

女真起る

女真〔また「阿骨打」といふ英雄があらはれ、兵を起して、遼の軍を破り、一七七五年〔宋の徽宗の時、鳥〕に、金の太祖となつて、しだいにその勢をたかめた。



俗風の眞女

國 アクダの建

擊 宋金の遼夾

金宋の交渉

この形勢を見てとつた宋の徽宗〔神宗の子〕は、金と約して、

遼の滅亡

年來の怨敵遼をはさみ撃つた。宋軍は、もろくも敗れたが、金軍は、大いに勝ち、ついで遼をほろぼした。この遼の滅亡は、宋にとつては、かへつて唇ほろびて齒寒しといふ結果になり、宋は、遂に金の大兵をかうむつた。徽宗は、戦はずして、位をその子にゆづり、膝を屈して、金と和したものの、和約履行の誠意を闕いたために、一七八七年〔崇徳天皇、また金軍に侵入せられ、徽宗父子及び皇后等、皆北方につれ去られてしまつた。〕

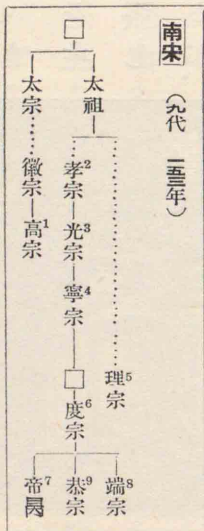
徽宗父子とらへらる

宋室の南渡

宋では、徽宗の子

高宗が位に即き、金の鋭鋒をさけて、しだいに南方にうつり、遂に都を臨安〔浙江省〕にさだめた。

1787



1939

南宋

高宗南にうつる

南宋和戦の議

当時、江北の地は、既におほかた金に占められ、宋の

岳飛等の主
戦論

領土は、いよいよちぢまつた。宋の忠臣岳飛等は、あくまでも、金と決



岳飛

戦すべきを主張したが、

屈辱的講和

は、秦檜の言に動かされ、不名譽の講和をなして、一時の安きを偷んだ。

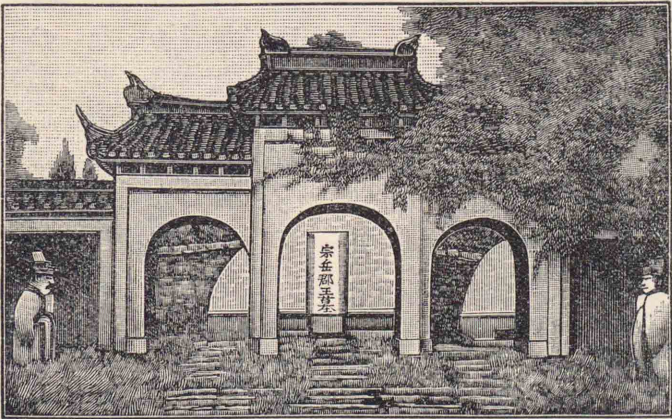
高宗



岳飛筆蹟

をたふとび、沈著寡言で、學につとめ、頗る兵法に

岳飛は、盡忠の士で、少年時代から、氣節



岳飛の廟

浙江省杭州にある。

南北間の平和

金の極盛

宋の衰微

同じ、且、腕力が強く、大小百戦、未だかつて一たびも敗れたことはない。金人は、皆飛をおそれ、山を撼すはやすけれど、岳家の軍を撼すは難しといつたといふことである。しかるに、秦檜は、飛を以て和を結ぶに害ありとなし、とらへて獄に下し、遂にこれを殺した。

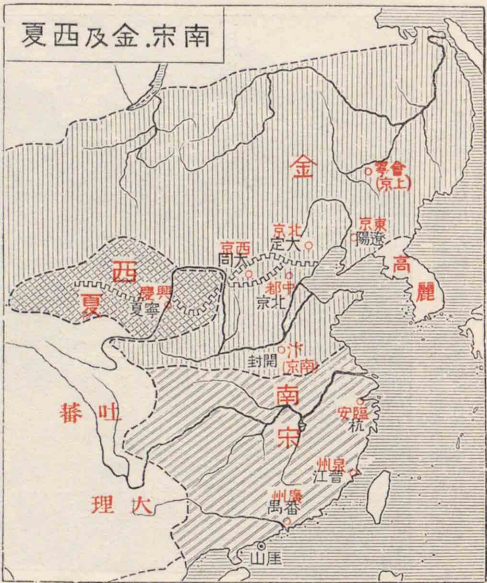
金の全盛

この後、ほどなく、

金にも宋にも、ともに明君が出て、兩國の間は、平和をたもち、しばらく事なきを得た。その間に、金は、東、高麗を威服し、西、西夏をなづけ、國運が、ますますさかえて、一時、東アジアの最大國となつた。

金宋の衰運

しかるに、金は、久しからずして、國勢が、かたむきはじめ、宋でも、奸臣が事を用ひ、朱熹以下の賢臣をしりぞけて、國政を



金の衰微

興 蒙古族の勃

みだし、やがて金を伐つて、大いに敗れた。金は、宋との戦には勝つたものの、また昔日の元氣がなく、日に月に衰へゆくのみであつた。この時に當つて、蒙古族が、新たに北方に勃興した。

存忠孝心

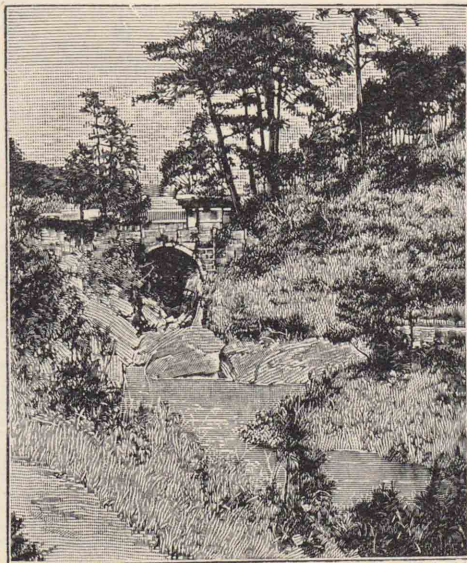
朱熹筆蹟



朱熹

宋代の佛教

宋の文化 佛教は、唐末以來、大いに衰へたが、宋の興るに及んで、太祖・太宗の保護により、各派



白鹿洞書院入口

白鹿洞は、江西省星子縣廬山の南麓にあり、朱子講學の地として有名である。白鹿洞書院の址は、今南昌高等農林學校の資料場となつてゐる。

朱熹と宋學

文章家

詩人

史學

書畫

東坡居士



蘇軾

ともに復興の運に向つた。中にも、最も盛んになつたのは、禪宗で、工藝美術はいふに及ばず、儒學の如きも、その影響をうけて、ふかく理論をきはめるやうになり、朱熹に至つて、いはゆる宋學を仕上げた。また文章は、五代の世に衰へたのを、宋のはじめに歐陽修が出て、古文を復興し、ついで蘇洵、蘇軾、王安石等の大家を出した。歐陽修と蘇軾とは、また非凡の詩才を有し、詩人

としても有名である。史學も、また大いに

發達し、司馬光の「資治通鑑」は、記事の正確と、文章の壯嚴

一時之譽

讀書保陰

なのとて名高い。また藝術、殊に書畫が、いちじるしく進歩し、蔡襄、黃庭堅は書を以

黃庭堅筆蹟

て、李龍眠は畫を以て、米芾は書畫かね善くするを以て、それぞれ世に知られてゐる。

◇司馬光と資治通鑑 司馬光は、字を君實といひ、學者であり、政治家であり、さうして、氣高い人格者であつた。英宗の勅をうけて、資治通鑑二百九十四卷を編し、前後十六年を費して、周の威烈王の二十三年(皇紀二五八年)から、後周の世宗の顯德六年(皇紀二六九年)に至るまで、一千三百六十二年間の治亂興亡の跡をのべた。

概 括

中古期は、晉が天下を一統した九四〇年頃から、南宋の中世頃に蒙古人の勃興した一八六〇年頃までの間で、わが第十五代應神天皇の御代から、第八十三代土御門天皇の御代に至る時代に當る。この期のはじめに、漢以來支那の内地に雜居してゐた異族は、晉の内亂及び人心のくづれたのに乘じて、各處に蜂起し、漢族たる晉を破つて、黃河の流域を占め、そこに國をたてたものが、前後およそ十餘の多きに及んでゐる。また晉は、江南にうつつて、揚子江の流域に國をなしたが、後遂に南北朝の世となつて、江南と江北とに二大國が分立し、雙方のおの天下の統一を欲して相争ひ、隋の起るに及んで、遂に一統された。



漢 筆 羅 龍 眠 李

この圖は、東京美術學校の所藏である。李龍眠は、名を公麟といひ、
佛像・山水・人物をよくゑがき、宋代第一の稱がある。

隋は、たちまち亡びて、唐の世となつたが、隋唐の時代は、漢族の最も隆盛を極めた時で、その文化が、四圍の諸民族に及んだと同時に、その勢力も、またアジャの大半に及んだのであつた。しかるに、五代五十餘年の間、天下が分裂して、不統一を極めたので、蠻族たる契丹の勃興を招いた。宋は、また天下を一統して、よく漢族の文化を進めたが、文弱の餘弊が甚しく、契丹をおそれ、西夏に苦しみ、ついで、また金に迫られ、遂に江南に遷都して、しだいしだいに衰亡の阪を下つた。

年表

(二)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代 (天皇) 重なる事蹟

中

唐	隋	南朝	北朝	東晉	西晉
1278—1567	1241—1279	1099—1249		977—1080	925—976
<p>一五六七 (醜) 朱全忠帝位に即き後梁の太祖となる</p> <p>一四一五 (孝) 唐亡ぶ</p> <p>一三七三 (元) 安宗の時大祚榮渤海國を建つ</p> <p>一三五〇 (持) 武后帝位に即き國號を周と改む</p> <p>一三二八 (天) 高宗高句麗を滅ぼす</p> <p>一三二七 (天) 高宗百濟を滅ぼす</p> <p>一三一七 (齊) 高宗西突厥を討ち平ぐ</p> <p>一三一〇 (孝) 高宗の時大食來り通ず</p> <p>一三〇四 (皇) 太宗高句麗を征す</p> <p>一二九五 (舒) 太宗の時景教唐に入る</p> <p>一二九一 (舒) 太宗の時突厥唐に入る</p> <p>一二八〇 (舒) 太宗の時玄奘印度に行く</p> <p>一二七八 (推) 李淵帝位に即いて唐の高祖となる</p>	<p>一二六七 (推) 煬帝の時日本の使節小野妹子來る</p> <p>一二七一 (推) 煬帝の高句麗親征</p> <p>一二七三 (推) 煬帝の高句麗再征</p> <p>一二七四 (推) 煬帝また高句麗を征す</p> <p>一二七九 (推) 隋亡ぶ</p>	<p>一二四九 (崇) 隋の文帝陳を滅ぼし南北始めて一統す</p> <p>一二四一 (敏) 楊堅、北周を奪ひて隋の文帝となる</p> <p>一二三七 (敏) 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す</p> <p>一二三二 (敏) 新羅、任那の日本府を滅ぼす</p> <p>一二二七 (欽) 西魏亡び北周起る。梁亡び陳代る</p> <p>一二一〇 (欽) 東魏亡び北齊起る</p> <p>一一九五 (安) 後魏東西に分裂す</p> <p>一一六二 (武) 齊亡び梁代る</p> <p>一一三九 (雄) 宋亡び齊代る</p> <p>一〇九九 (允) 後魏の太武帝江北を一統す</p>	<p>一〇八〇 (允) 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる</p> <p>一〇四三 (仁) 肥水の戰</p> <p>九七七 (仁) 東晉の元帝位に即く</p> <p>九七六 (仁) 匈奴晉を滅ぼす</p> <p>九二五 (應) 司馬炎帝位に即き晉の武帝となる</p>		

年表

(二)

年代は皇紀に據る

古		中				
宋南	宋北	五代	唐			
1787-1939	1620-1787	1567-1620	1278-1567			
宋南	宋北	五代	唐			
1787-1939	1620-1787	1567-1620	1278-1567			
一七八七 (崇德) 高宗即位。宋室南渡 一八〇一 (崇德) 高宗金と和す 一八五六 (後鳥羽) 寧宗の時韓侂胄權を専らにし朱熹等を斥く	一六二〇 (村) 趙匡胤帝位に即き宋の太祖となる 一六三九 (圓融) 太宗の一統。太宗遼を伐つて敗る 一六七〇 (一) 宋の眞宗の時遼の聖宗高麗を伐つ 一六九八 (後朱雀) 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す 一七二九 (後三條) 神宗王安石を用ふ 一七七五 (鳥羽) 徽宗の時女眞のアクダ帝と稱す 一七八五 (崇德) 徽宗父子金に捕へ去らる 一七八七 (崇德)	一五六七 (醜) 朱全忠帝位に即き後梁の太祖となる 一五七六 (醜) 後梁末帝の時契丹の耶律阿保機帝と稱す 一五七八 (醜) 後梁末帝の時王建高麗を建國す 一五八三 (醜) 後梁亡び後唐起る 一五八六 (醜) 耶律阿保機渤海を滅ぼす 一五九六 (朱雀) 後唐亡び後晉起る 一六〇六 (村) 契丹の太宗後晉を滅ぼす 一六〇七 (村) 後漢起る 一六一〇 (村) 後周、後漢に代る 一六二〇 (村) 後周亡ぶ	一三〇四 (皇極) 太宗高勾麗を征す 一三〇五 (舒明) 太宗の時景教唐に入る 一三〇九 (舒明) 太宗の時東突厥を滅ぼす 一三二一 (孝德) 高宗の時大食來り通ず 一三二七 (齊明) 高宗西突厥を討ち平ぐ 一三三三 (天智) 高宗百濟を滅ぼす 一三三八 (天智) 高宗高勾麗を滅ぼす 一三五〇 (持統) 武后帝位に即き國號を周と改む 一三七三 (元明) 玄宗の時大祚榮渤海國を建つ 一四一五 (孝謙) 玄宗の時安祿山反す 一五六七 (醜) 唐亡ぶ	一三六七 (推古) 煬帝の時日本の使節小野妹子來る 一三七一 (推古) 煬帝の高勾麗親征 一三七三 (推古) 煬帝の高勾麗再征 一三七四 (推古) 煬帝また高勾麗を征す 一三七九 (推古) 隋亡ぶ	一〇九九 (允恭) 後魏の太武帝江北を一統す 一一三九 (雄略) 宋亡び齊代る 一一六二 (武烈) 齊亡び梁代る 一一九五 (安閑) 後魏東西に分裂す 一二一〇 (欽明) 東魏亡び北齊起る 一二一七 (欽明) 西魏亡び北周起る。梁亡び陳代る 一二二七 (敏達) 新羅、任那の日本府を滅ぼす 一二三二 (敏達) 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す 一二三七 (敏達) 楊堅、北周を奪ひて隋の文帝となる 一二四九 (崇峻) 隋の文帝陳を滅ぼし南北始めて一統す	九二五 (應神) 司馬炎帝位に即き晉の武帝となる 九七六 (仁德) 匈奴晉を滅ぼす 一〇三七 (仁德) 東晉の元帝位に即く 一〇八〇 (允恭) 肥水の戰 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる

源實朝の
征夷大將
軍たる頃

蒙古人の原
住地

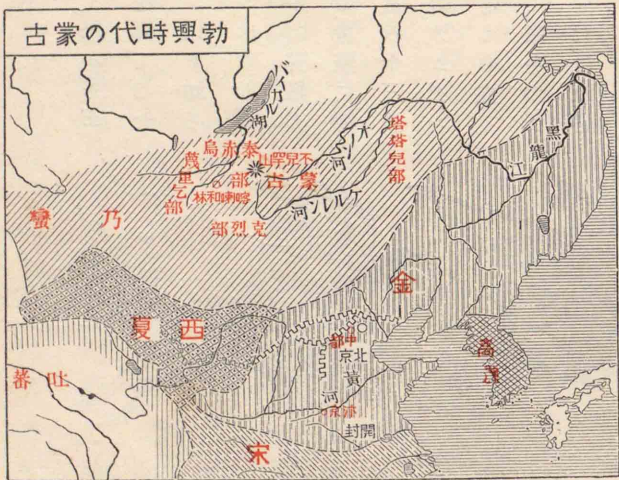
テムヂンの
蒙古諸部一
統

チンギス汗
の即位

第三篇 近古

第一章 蒙古の勃興

蒙古の勃興 蒙古は、オノン〔難〕ケル
 レン〔怯〕兩河上流地に遊牧生活を
 いとなんてゐた種族である。宋・金と
 もに衰へた頃、そこにテムヂン〔鐵〕木
 といふ豪傑が出て、しだいに諸部落
 を従へ、一八六六年〔南〕宋の寧宗の御代、土、盛ん
 な大汗即位式を舉げて、チンギス汗
 〔成〕吉思汗。チンギスは蒙古語、強
 〔盛〕の義、汗は「君主」の義である。と稱した。
 これが即ち蒙古の太祖で、その即位
 の年は、わが源頼朝の死後七年にあ



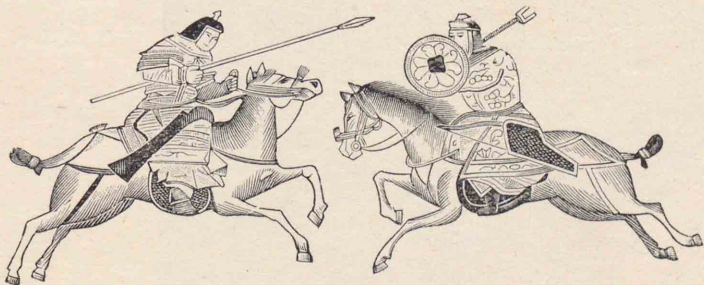
たる。

◇テムヂンの生立 テムヂンは、父をエスガイ、母をホエルンといつた。エスガイは、勇悍で部下の尊信を得てゐたが、遂に他部のために殺された。それで、テムヂン以下幼子たちは、皆ホエルンの手にのこされた。ホエルンは、なかなかの賢婦人で、勇氣にも富み、十三歳のテムヂンをもり立てて、家をつがせた。けれど



汗スギンチ

も部下の諸族は、多くそむき去り、四鄰の強敵は、しばしば侵入して、テムヂンに危害を加へようとした。或時、テムヂンをなきものにし、後後の憂の根を絶たうとして、急に襲つて來た敵があつた。テムヂンは、深林の中に身をひそめ、



士兵の古蒙

質 蒙古人の性

西夏及び金を攻む
中央アジア諸國平定
ロシヤ遠征

九日間全く食物を得る事も出來ず、絶望のあまり、ひそかに山を下るところを敵に捕へられ、頸と手とに、嚴重に錠を施された。一夜、テムヂンは、監守の童子をうちたふして脱出し、オノン河に沿うて、ひた走りに走り、河流に身をしづめて、一時の危難をのがれた。しかし、敵の搜索が嚴密であるので、一老夫の許に走つて、救助を求めた。老夫は、テムヂンを車にのせ、その上に羊毛を高く積みあげて置いた。敵は、老夫の家をくまなくさがし終つて、しつこくも、その車に及び、槍をとつて羊毛の中に突き立てた。その切先がテムヂンの脛を傷つけたが、テムヂンは、身動きだにしなかつたので、発見されることを免れた。かかる危難は、この外にも、なほたびたびあつて、テムヂンは、實に困苦の中に憂き年月を送つてゐたのであつたと云ふ。

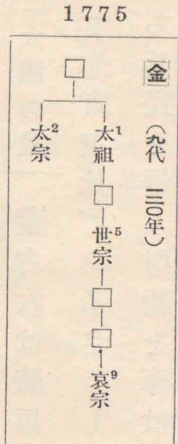
太祖の業

蒙古人は、騎馬に長じ、勇敢で、忍耐力が強く、君主に對して、忠實無比である。さうして、かれらは、敵を攻める時には、城池を毀ち、兵民を屠り、財物を奪はねばやまぬといふ風がある。太祖は、これを率ゐ、まづ西夏を攻めて、これを降し、ついで金をおかして、その黄河以北の地をとり、轉じて中央アジアの諸國を平げ、さらに將を遣はして、遠くロシヤに侵入させ、みづからは印度の西北部に入り、や

北條泰時
執權時代

西夏を滅ぼす
太祖の死

がて、ひきかへした。後、ほどなく、太祖は、全く西夏をほろぼし、進んで金を伐たうとして進軍したが、途中、病にかかり、一八七七年〔南宋の理宗の世、後堀河天皇の御代〕¹²²⁷遂に死んだ。



金を滅ぼす

北條泰時
執權時代

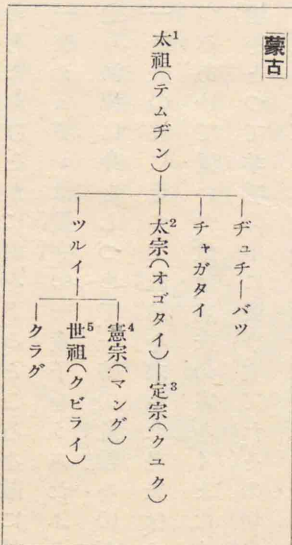
一八九四年〔南宋の理宗の世、四條天皇の御代〕、相共に金を伐つて、これをほろぼし、ついで都をカラコルム〔和林〕にさだめ、さて、いよいよ大規模の討軍を起



太宗

を起す

1866



太宗の業

太祖の死後、その第三子

オゴタイ〔窩淵〕が、大汗の位に即いた。

これが太宗である。太宗は、宋と約し、

これをほろぼし、ついで都

をカラコルム〔和林〕にさだめ、さて、いよいよ

宋を侵し高麗を降す

ロシアその他の蹂躪

キプチャク汗國の建設

クビライの南征

クラグの西征

して、宋を攻め、また兵を出して、高麗を降し、別に甥バツ〔拔〕をしてヨーロッパに侵入させた。

バツの西征

1236

バツは、一八九六年〔南宋の理宗の御代〕、五十萬の大軍をひきゐ

て、征途にのぼり、キルギス草地を過ぎて、ロシアに入り、到る處、焚掠

をほしいままにし、進んでドイツの東南部及びホンガリヤをおか

した。全歐の天地は、ために震撼し、天兵降るとさへいつて、おそれた

のであつたが、たまたま太宗死去のしらせが來たので、バツは、諸將

に命じて、東にかへらせ、おのれはとどまつて、諸屬國をしづめ、ついで

ロシアにキプチャク〔欽〕汗國〔帳汗國〕をたて、サライを都とした。

憲宗の業

太宗の後、一代をへて、憲宗に至り、また兵を出して、四方

を征した。弟クビライ〔忽必〕は、大理國〔雲南〕を平げ、轉じてチベット〔藏〕に

攻めこんで、これを従へ、且、別軍を遣はして、安南を征服させた。また

クビライの弟クラグ〔旭烈〕は、遠く西アジア地方を定め、イル汗〔汗兒〕

憲宗の南征



と稱して、タブリスに都し、バツのキプチャク汗國及びチンギス汗の次子チャガタイ〔台察合〕の封ぜられたチャガタイ汗國〔マリク地方のアル〕として中央ア〕とともに、いはゆる蒙古の西方三大汗國をなした。憲宗も、また親しく軍をひきゐ、クビライ等と途を分つて、宋を攻めたが、功半ばで、陣中に病死した。

第二章 世祖の業 東西の交通

前年龜山天皇即位

世祖の南伐

世祖の業 憲宗死後、クビライが、大汗の位にのぼつて、世祖となつた。世祖は、都を燕京〔今北京〕にうつし、後、國號を元とあらため、南伐して宋の臨安をおとし入れた。この時、宋には、誠忠の士文天祥などがある。つて、恢復をはかつたが、衰弱しきつてゐる宋は、到底、元軍に敵しが

北條時宗執權時代

宋の滅亡

宋滅亡の大原因

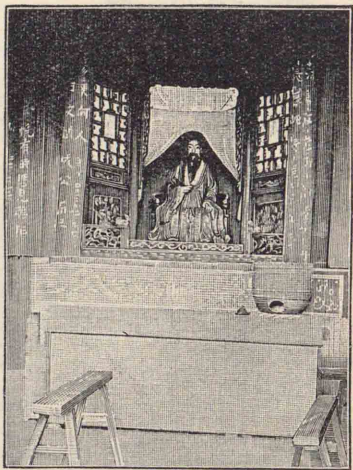
たく、しだいに南方におひちぢめられ、一九三九年〔後宇多天皇の御代〕遂に全くほろぼされた。宋は、太祖の即位から、ここに至るまで、實に十八代、三百二十一年で、國初以來、文治をたふとんだ結果、名臣、大儒は、多くあらはれたが、その兵力が、つねに振はず、武功のほとんど觀るべきものがなくて亡びた。

◇文天祥

文天祥は、博學能文の士で、氣節が高かつた。力を宋の恢復につくしたかひもなく、元軍にとらへられた。元では、しきりに元につかへて宰相とならんことをすすめたが、天祥は、國ほろびて救ふこと能はず、人臣として、死すとも尙餘罪がある。況んや、あへてその死をのがれて、その心を二つにすることが出来ようかといつて、頑として、頑として、燕京の獄



刻模蹟筆祥天文



北京晉賢坊なる文天祥の祠にある。

祥天文

文永の役
弘安の役

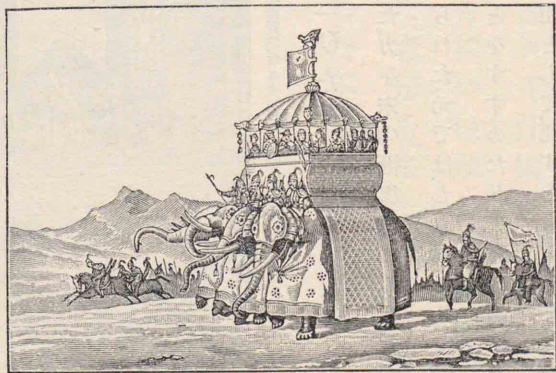
東征の失敗

東西の交通
南方經略の成功
蒙古領域の大

につながられ、遂に斬られた。その獄中作る所の正氣歌は、悲壯淋漓、憤夫をして立たしめるものがある。

元の極盛 世祖は、またわが日本をも従へようとして、前後二回、兵を出したが、かへつて大いに敗れ、歐亞にまたがる大勢力を以てしても、一指をだにふれることが出来なかつた。ただし、元は、その南方經略には成功し、緬國メンコク、占城チャンパ、安南アンナム、シムから、ジャヴァ、スマトラ等に至るまで、或は降り、或は朝貢したのであつた。

東西の交通 かくの如く、蒙古は、アジア、ヨーロッパの二大洲にまたがる大領土をたもち、領内には、道路、宿驛ウキの制も、ほほ備はり、守備隊シュベタイの配置等が、またややととのつてゐた。



陣出の祖世

元

東西の交通と通商貿易

宗教學藝の傳來

マルコポーロ來る

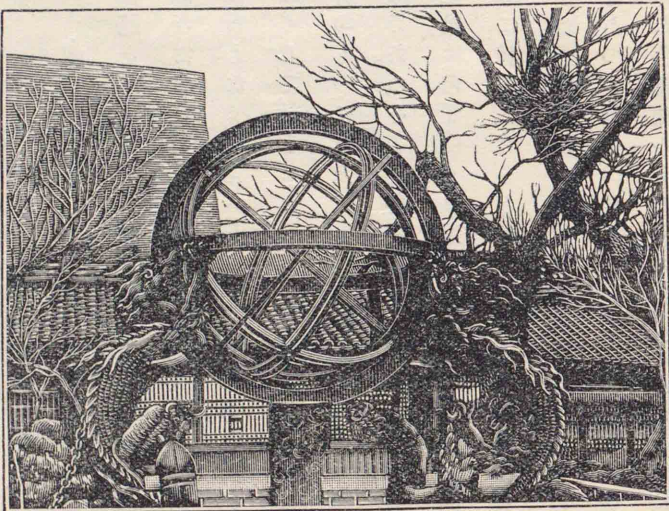
東方見聞録

東西文明の混和



ローボ=コルマ

から、海陸共に東西の交通を促し進めた。それにつれて、通商貿易が盛んになり、はるばるヨーロッパから來て、キリスト教及び天文數學その他の學藝を傳へたものも少くなかつた。その中で、イタリヤの商人マルコポーロは、世祖につかへて、久しく支那にとどまり、歸國の後、東方見聞録アッハを著し、その書中にジパン日本の富盛



元代の建造にかゝる。

儀天渾の臺文天京北

なありさまをのべ、はじめ、わが日本をヨーロッパ人に紹介した。

◇マルコポーロと東方見聞録

マルコポーロは、一九二四年(北條時頼執權時代)に、イタリアのヴェニスに生まれ、十八歳の時、父ニコロ叔父マフオにつれられて、旅に出で、ベルシャを横ぎり、バミール高原をこえ、天山南路をへて、元の大都北京に著し、世祖に謁したのは、一九三五年であつた。かれは、世祖の寵を得て、官吏にあげ用ひられ、久しく支那にとどまり、一九五五年、國にかへつた。歸國の後、まもなく、ヴェニスとジェノアとの間に、戦が起つた時、かれもまた出陣したが、武運つたなくして、敵手にとらへられ、ジェノアの獄に投ぜられた。その獄中、つれづれなるまま、同房のものに、東方にあつて見聞した所を語りきかせた。それを筆記したのが、東方見聞録である。その記事中に、ジバングは、支那大陸の東方千五百哩の海中にある一大島で、住民は、色が白く、風采が美しく、なかなか開けてゐる。その宗教は、偶像崇拜で、かつて外國に隸屬したことはない。そして、非常に黄金に富み、ほとんど無盡藏である。王宮の屋根は、西洋諸國の寺院が、鉛板を以ておほはれてゐるやうに、黄金の板を以てふかれ、床もあつて黄金の伸板を敷きつめ、窓にも黄金が用ひられてゐる。またこの島には、多くの赤色眞珠をも産する云々とある。この珍奇の内容が當時のヨーロッパ人の心を刺戟し、進んでこれを探検しようと企てるもの

Quoniam autem magni kaam aspectui oblati sunt ipse rex summe benignus erat et eos suscepit alacriter Inquisit autem ad eis p multas vices de condicionib occideraliu pccu de impatore ronoz de regib et principib xpianis et qliter i eoz regnis suabat iusticia qliter ecia i rebus bellicis se debat Inquisit ecia diligit de morib latinor et sup oia diligenti inrogavit de papa xpianor et de cultu fidi xpiane Ipi at vt viri prudentes sapient ad singula ruderunt ppter qonq sepe eos ad se introduci iubebat dabuerunt q gratiam in oculis eius.

Quo ab ipso rege ad ronu pontifice missi sunt Capitulu quartu

Quada igitur die pfatus kaam consilio prius cu baro nibus habito rogavit pfatos viros vt sui amore redi rent ad papa cu vno de suis baromb qui dicebat cogara p pre ipius sumu pontifice xpianor rogatur quaten ad cu centu sapientes xpianos dirigeret qui scirent ondere su is sapiencia ronabilis et pvdeter si veru erat q xpianor fides esset melior int oes. et q dij tartaroz eent demones et q ipi et orientales alij decepti erant in suoz deoz cultura desiderabat cam audire ronabilis q fides esset ronabilis y mitada. Quq pccidissent buis cora eo dicentes se ad cucta eius bnplacita preparatos fecit rex scribi lras ad romanu pontifice in lingua tartaroz quas illis tradidit deferendas Tabula ecia aurea testimoniale ill tradi iussit signo regali sculpta et insignita. in p suetudine sedis sue qua qui defert deduci debet de loco ad locu a cunctis superiorib civita tu suo imperio subiectaz cu omni sua comitiva securus e q diu imozari voluerit i civitate vel opido det illi de expen sito et necessarijs oibus integrat pvideri Insup impo sit ei rex vt de oleo lapadis q pendebat ad sepulchru dni nostri ihu xpi in ibrlm ei deferrent in reditu. A redebat

これは東洋文庫所蔵「東方見聞録」の一部で、一四八五年にアントワ
 ープで刊行したラテン譯の初版である。活版術發明後、まもない時
 の印書の體裁をうかがふ一材料ともなる。

を生ぜしめたのであつた。

第三章 元の衰亡 明の統一 チムール

元の衰亡

元の世祖は、支那の天子となつて、支那及び南方に威を



元の紙幣

ふるつたが、その大領土の西部には、だんだん威令が行はれなくなつて、チヤガタイ汗國もキプチャク汗國もイル汗國も、遂

にみな分離獨立して、相たがひに争つた。また元は、はやくから財政の困難に苦しみ、世祖以來、これが整理の途に窮して、しきりに重税をとりたて、且、みだりに紙幣を發行したために、いやが上にも財政をみだして、物價は、いよいよ騰貴し、人民は、生活の苦しさにたへず、

財政困難

三汗國の分離獨立

漢人の蜂起

朱元璋金陵に據る

太祖の一統

太祖の政治

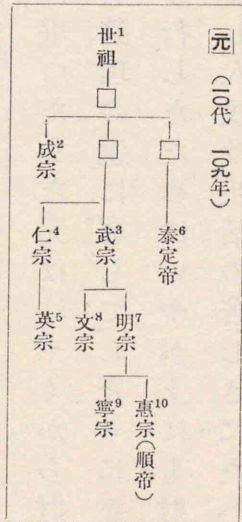
天下は、漸く不穩の雲におほはれた。この時に乘じ、かねて元の壓迫に不平をいだいてゐた漢人等が、一時に蜂起し、二十餘年の大亂を重ねた末、群雄中の大立物である朱元璋が、三〇八年〔長慶天皇の踐祚〕に、金陵〔江蘇省〕に於て、帝位に即き、明の太祖となつて、ますます元に迫つたので、時の元の天子は、蒙古ににげかへつた。世祖が燕京に都してから、ここに至るまで、百五年である。



太祖

明の太祖の業 明の太祖は、即位の後、ほどなく天下を一統した。これにて、支那は、また漢人の天子をいただくこととなつた。太祖は、心を國政に用ひ、漢の高

1920



2028

制度の改革
租税の軽減
教育の奨励
子弟を各地に封じた

この頃足利義滿專横を極む

燕王の反
北京奠都

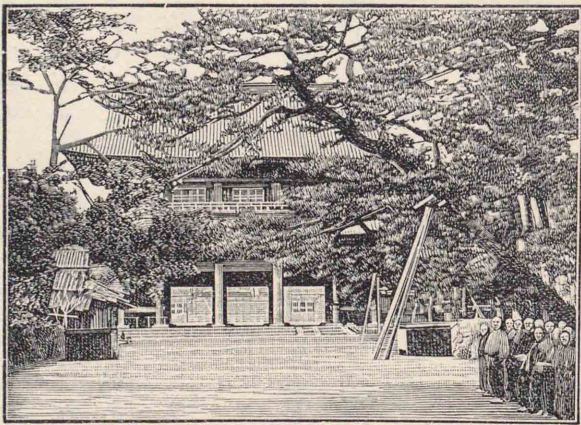
祖と同様、一族の諸王を要地に封じて、帝室の藩屏としたが、太祖について立つた惠帝〔太祖の孫〕は、諸王の強大なるを憂へ、漢の景帝の例にならつて、これを抑へることをこころみ、かへつて叔父燕王の反を招いた。燕王は、大舉して金陵に迫り、遂にこれを攻めおとし、自立して成祖となり、燕京を北京とあらため



皇后馬

し、金陵を南京と稱した。

◇太祖の皇后 太祖の皇后馬氏は、寛厚な賢婦人で、その内助の功は、實に偉大である。はじめ太祖が



太祖の陵正門

陵は、江蘇省江寧縣にあつて、一三五八年の造營にかゝる。

内注

租税駐泊

産業獎勵

教育振興

出版

性理大全
性理大全

成祖の政治

兵を起して、しだいに勢を得た頃、馬氏は太祖に人を殺さぬことを以て本となされたならば、人心は、おのづから歸服するでありませう。人心の歸する所は、即ち天命のある所で御座います」と説いたのであつた。後、太祖が帝位に即くに及んで、馬氏は立てられて皇后となつたが、謙遜で、慈悲の心がふかく、女の道に於てほとんど闕くる所がなく、つねに太祖の食膳を自ら點檢し、その食事の世話まで親しくなされた。臣下の人たちが、御自身でなされるのは、勿體ない。宮中には他にその人があります」と申し上げると、后は、自らこれをなすのは、一には上を敬する趣旨であり、一にはもし食膳に粗相があれば、臣下の落度として、おとがめをかうむることになるから、といはれた。女として人の上に立つものは、この心がけがなければならぬ。

成祖の治

成祖は、産業をすすめ、教育をはげまし、よく天下を治めたが、惠帝が、金陵陥落のをり、海外にのがれたのではなからうかと疑ひ、鄭和を遣はして、これをさぐらせ、かねて、明の武威を海外にかがやかさせた。鄭和は、前後七回、南洋及び印度洋に航して、大いに明の威徳を示したから、南方諸國は、多く明に貢をささげるやうにな

南海諸國の
入貢

外注

鄭和の遠征

朝貢口南洋印度洋

通商貿易

植民移住

漢人親信

蒙古の商

中南



祖 成

り、通商貿易も、したがつて發達し、海外に植民移住するものが、多きを加へ、漢人の海外發展に一新時期を劃した。

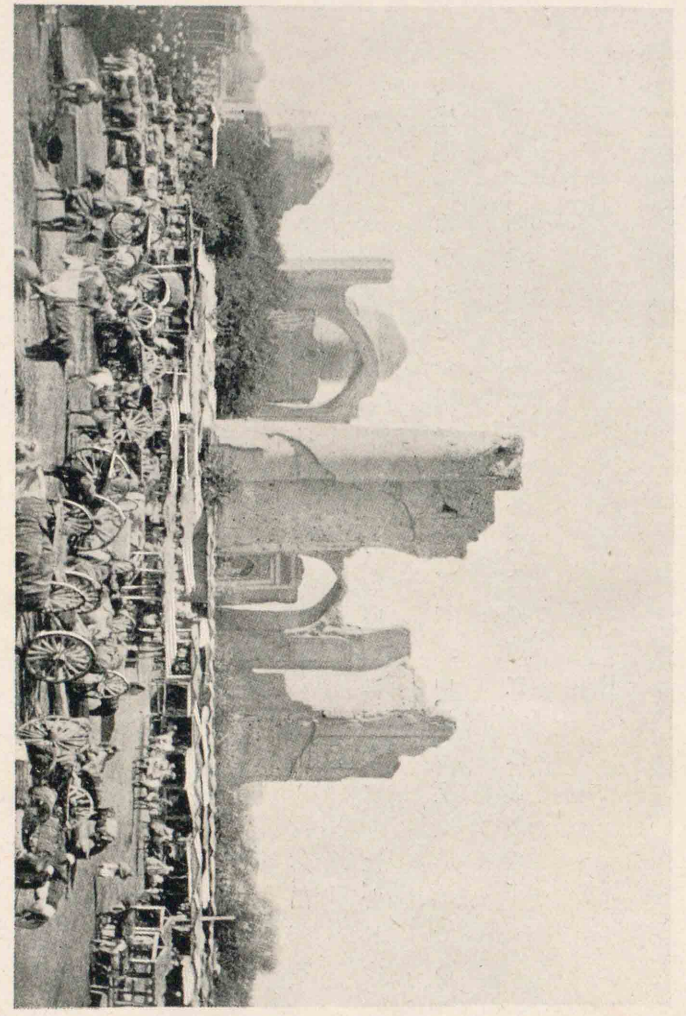
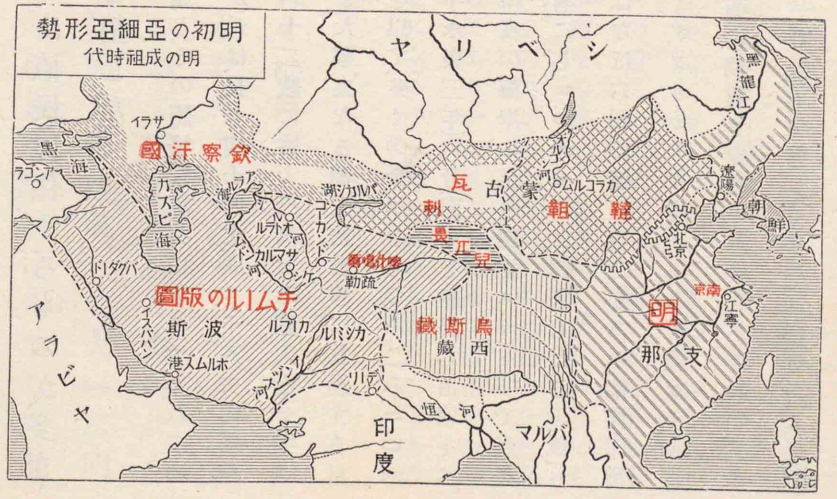
◇鄭和の遠征 鄭和は、容貌魁偉、身長九尺に達し、その體格智謀、共に衆にすぐれてゐた。かれは、長さ四十四丈、廣さ十八丈の新造船六十二艘に、將士三萬七千餘人を分乗させ、また順良なる蕃王酋長等に賞賜する目的を以て、多くの金帛をもつこみ、二〇六年(永樂三年)六月、南京を船出し、占城をへて、印度の海岸に至り、歸途、スマトラで酋長を擒にし、二〇六七年に歸國した。この後、二

〇九〇年に至るまで、約二十五年の間に、かれはなほ六回の遠征をこころみ、南洋、印度のみならず、ペルシャよりアラビヤに至り、遠くアフリカの東岸、イタリヤ領ソマリランドの沿岸に及び、三十あまりの國國をして明に朝貢させた。

チムールの業 さきに、元が東方に於て勢力を失つた頃、蒙古の西

三汗國の衰微
 チムールの興起
 西曆一三三五年
 4 ユグタイ汗國
 外名
 1 チヤグタイ汗國
 2 イル汗國
 3 キプチャク汗國
 4 印度
 5 明(成祖)
 一四〇五
 チムールの併呑

方三大汗國も、また皆衰へた。しかるに、やがてチヤグタイ國にチムール(帖木兒)といふ豪傑が出て、明の太祖が即位したところに、自立してサマルカンドに都した。チムールは、平素チンギス汗の大業を慕ひ、世界統一の大志をいだいて、しきりに兵を四方に用ひ、中央アジア及びイル汗國等をあはせ、キプチャク汗を伐つて、これを逐ひ、ついで印度をおかし、またオスマントルコを攻めて、その帝を虜にした。これ、西方諸國は、ほとんど皆その威風になびき服したから、チムール



場市るけに時現と墟廢のムマ一カ一イバ

本
理
陽
堂
平
方
面

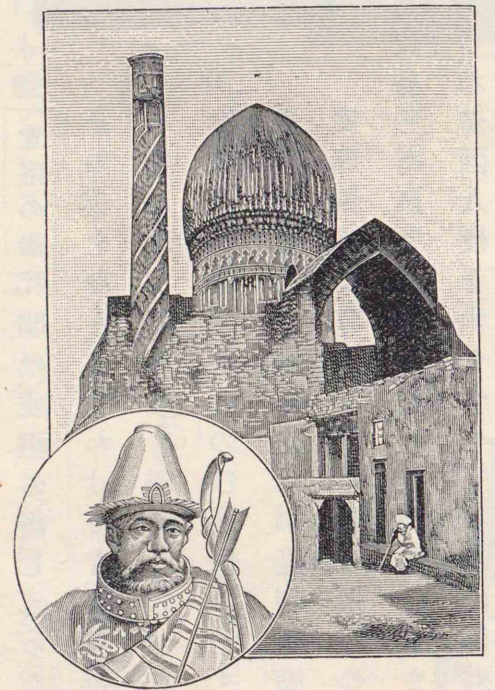
バイバイ—カーヌムは、チムールがその愛妃のためにたてた廟殿で、サマルカンドにある。今は、全く荒廢したが、それでもチムール時代の全盛の一斑をうかがふことが出来る。サマルカンドは、シル・アム兩河の中間にあつて、今は、昔日の盛觀はないが、その附近が、中央アジア中、最も豊沃の地であるから、商業が盛んで、人口およそ五萬五千ほどある。

チムールの東征

ルは、さらに東征して、支那を平げ、明のためにくつがへされた蒙古人の勢力を恢復しようとして企て、大舉して東行する途中、病んで死んだ。それは實に明の成祖の在位中の事で、¹⁴⁰⁵二〇六年〔後小松天皇の御代〕に當るのである。

◇チムールの教訓

チムールは、一九九六年（湊川の戦）のあつた年、サマルカンドの南ケシ（湯石）に生まれた。或時、一小蟲が草の莖をよぢのほるのを見たかれは、その小蟲が幾度も幾度も地におちながら、屈せずして、遂にその目的を達したのを感じ、左右の者に向つて、「この小蟲は、忍耐不屈である。われ等は、これを手本とすべ



チムールの廟

廟はサマルカンドにある。

宣宗の治
日明の交通
美術の進歩
義教

明の盛時

日明交通



宣宗

きだ。何人でも、忍耐力を張り、深く謀り、遠く慮つて、一たび定めた目的に向ひ、百折して
もたゆまず進めば、遂に志を達することが出来るであらうといつた。

宣宗の治

明は、成祖の後、しばらくは、その業をおとさず、わけても、宣宗〔成祖の世には、良臣が多く、朝廷にあつたので、政治がよくととのひ、藝術の如きも、いちじるしく進んだ。わが足利義満は、支那貿易の有利なるを知り、太祖の時以來、しばしば明と交通貿易したが、この頃に至り、足利義教も、また好を明に修めた。これから、わが國人は、ますますしげく明に往來して、薬種、織物等を輸入し、且、畫法や磁器の製法などを傳へた。

第四章 明の衰運 朝鮮の建國 滿洲の興起

明の衰運
宣宗の専横

太祖の對宣宗の専横

柳登の専横

宣宗の専横、成祖の専横、各代に宣宗の及通

英宗の専横

王守仁の専横

宣宗の専横の由來

(中江藤樹)

(龍溪の)

北虜の南侵

北虜の南侵

盜賊及び諸王の亂

南侵の件

宣宗の専横と内亂

明の太祖は、漢唐の弊にかんがみ、宦官をおさへて、國政にあづからせなかつた。しか



王守仁

貴州省貴陽縣にある石に刻したものの。

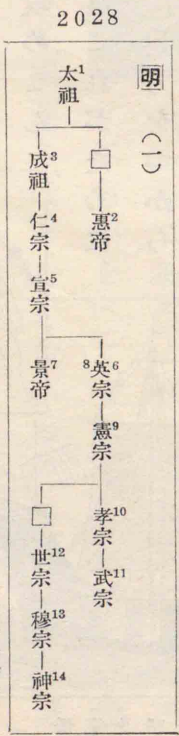
武宗に至つて、最も甚しく、國政も、大いにみ

だれた。それで、盜賊が諸方に起り、諸王の中にも、叛くものが出たが、幸にも、名儒王守仁

等の盡力によつて、これを平げることを得た。かくの如く、内に宦官の跋扈してゐる間に、外には

北虜・南倭の禍

北虜・南倭の禍



陽明

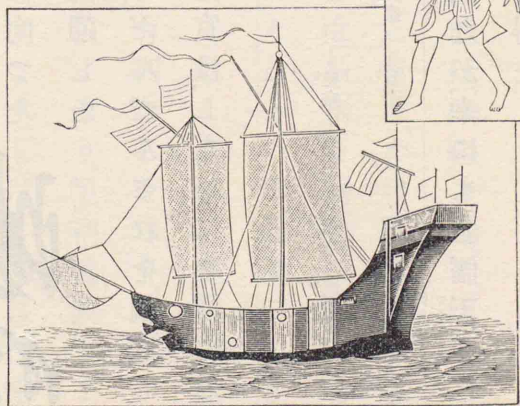
王守仁筆蹟

北虜

南倭

高麗と遼金
及び蒙古

また南北に外寇をうけて、明の国力は大いに衰へた。これよりさき、元の後なるタタール(韃靼)が、北方に威勢をふるつて、内外蒙古を一統し、しばしば明に攻めこんで、これを苦しめた。明は、これがために財をつひやし、且、大いに兵力をつからせた上に、國初以來、また倭寇になやまされた。明人は、非常にこの倭寇をおそれ、タタールとならべ稱して、北虜、南倭といひ、ふかくみづから警戒したのであつた。



船のそび及寇倭

朝鮮の建國

高麗は、遼の盛んな時には遼に、金が起れば金に、蒙古が榮えれば蒙古に、それぞれ臣としてつかへ、明の起るに及んで、ま

朝鮮の建國

宣祖

神宗

高麗の衰微
李成桂の自立

明の朝鮮半島に及ぼした影響

満州族の興起

女真族

ヌルハ

ナトウラ

遼陽

豊臣秀吉の朝鮮出兵

萬曆の役及びその影響



神宗の時は、後龜山天皇が吉野から京都におかへりになつた二〇五二年に當るのである。これから、朝鮮は、およそ二百年をへて、宣祖(李)の世に、わが豊

臣秀吉の大兵をかうむり、國運も、ほとんど危かつたが、幸にして、滅亡をまぬかれ、徳川氏に至つて、國交を恢復した。

明末の形勢

秀吉が兵を朝鮮に出した時は、明は、あたかも神宗の世であつた。神宗は、朝鮮王の請にまかせ、兵を發して、これを援け、か

黨争

へつて大いに敗れた。そのため、明は、一層疲弊したのであつたが、後



には、黨争の禍がまた甚しくなつて、ますます國政をみだした。この時に

女真族の勃興
流賊の蜂起

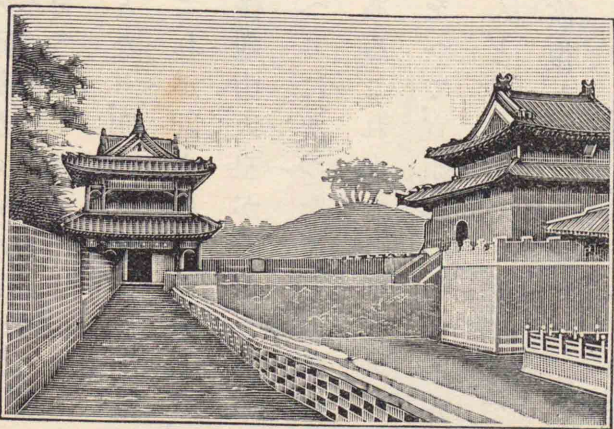
乗じて、滿洲に女真族が勃興し、國內諸方に流賊も蜂起して、遂にいかんともすべからざるに至つた。

滿洲の勃興

女真族は、金のほろびた

後、久しくその勢が振はなかつた。しか

るに、明の神宗の時、アイシンギョロ〔愛新覺羅〕



東陵

東陵は、奉天城を距る東三里の處にある。陵に向つて右前にある樓内に、太祖の碑が立つてゐる。國の中央に圓頭形をなしてゐるのが即ち陵で、太祖の遺骸は、この下に眠つてゐる。

前年大阪
落城豊臣
氏亡ぶ

ヌルハチの
興起

太祖の即位

瀋陽奠都

氏のヌルハチ〔努兒哈〕が、嚇圖阿拉〔今之興寧縣〕から起るに及んで、またしだいに強盛に赴いた。ヌルハチは、近隣の諸部落を従へて、國を後金と號し、二七六年〔明の神宗の世、後、永明天皇の御代〕遂に帝位に即いて、太祖となり、すすんで瀋陽〔奉天省瀋陽縣〕遼陽等を略し、都を瀋陽にさだめた。

第五章 モゴル帝國 ポルトガル・オランダ等の

の東洋經略

チムール死
後の形勢

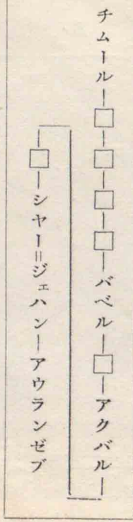
モゴル帝國の隆盛

チムールの死後、その國は、たちまち亂れて、四分五裂したが、およそ百年ほどたつて、遠孫バ

バベルの創
業



ベルが、アフガニス
タンから



起つた。バベルは、一八六六年〔明の世宗の世、後、印 1526〕

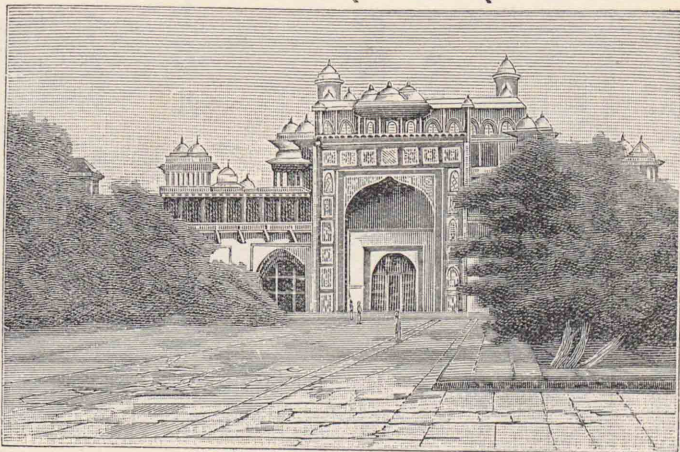
この年後
奈良天皇
踐祚

アクバル及
ビシヤールの
ジエハンの
事蹟

アクバル
都 中印度
宗教政策
回教
印度教
アムールの印度教徒と
結婚
回教ノ権利
融和
帝國の全盛

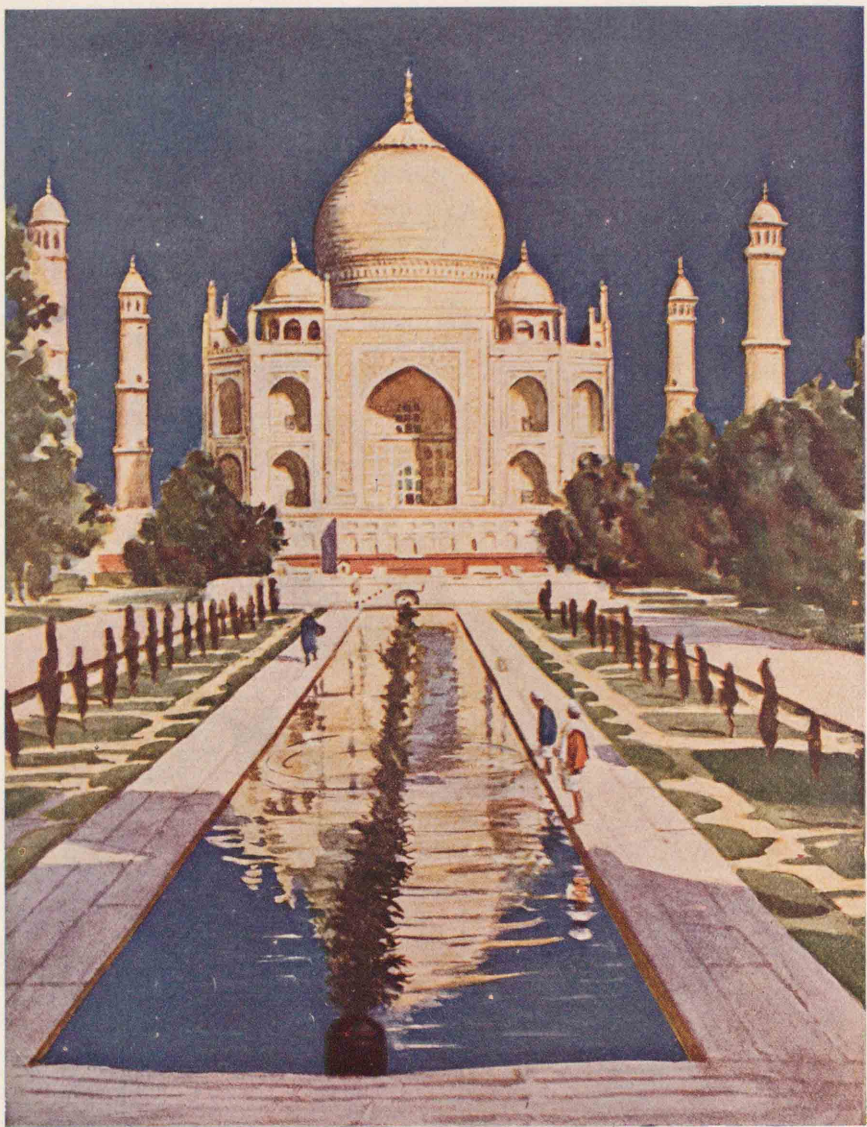
度に攻めこんで、印度皇帝の位にのぼり、デーリに都して、モゴル〔英臥〕帝國の基をひらいた。バベルの孫アクバル〔織田信長・豊臣秀吉・徳川家康と同時代の人〕は、世にまれな英雄で、都をデーリの東南アグラにさだめ、遂にことごとく北中兩印度を従へたが、その孫シャーリジェハンの時、さらに領土を南方にひろめ、且、デーリとアグラとに壯大なる建築を起して、その盛世をかざつた。この頃が、モゴル帝國全盛の時代であつたのである。

◇バベル バベルは、戦亂の間に成長し、戦争に關する事蹟の多い人であるが、同時に、文學を好み、美術を愛し、剛果の一面また武士的



廟の帝大ルバクア

印度セクンドラにある。



ル - ハ マ = ユ ジ タ

ミヤー、ハン
 在服 南印印度
 アフリカに建築
 アウラニクセフ
 失敗 東救改策
 印度教の及乳
 コラータ同盟
 津波
 衰運に悩む

タジュマハールは、アグラ市公園の一部にあつて、ジユムナ河に臨んでゐる。これはアクバル大帝の孫シャー・ジェハーン帝がその愛妃のために建てた廟殿で、およそ二萬の人を使役し、約二十年を経て出来あがつたものだと言へられてゐる。この建築は、白大理石を用ひて作り、世界で最も完備した建築物の一で、處々に瑪瑙・珊瑚・碧玉の類を嵌入し、結構、壯麗を極め、實にモゴル帝國全盛期の好記念物である。

印度
 ポルトガル人東航
 東航の動機
 オスマントルコ勸導
 小アフリカ陸上交通
 オルトガル

東西交通の困難

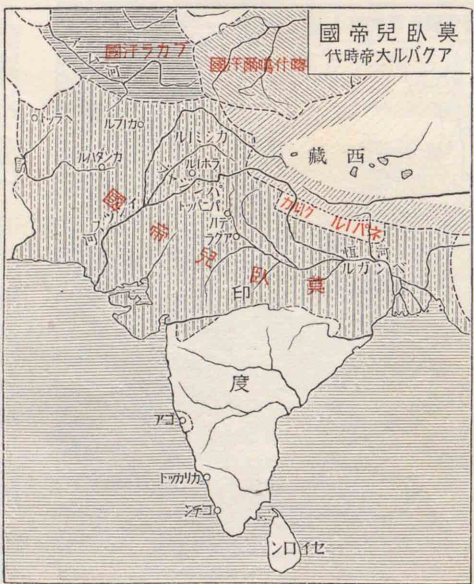
ポルトガル人の航海業

ポルトガル人の東航

さきに元の盛時に、一たび開けた東西の交通

寛恕の徳があり、殊に克己の精神に富んでゐた。かつて、酒のために行をあやまつたことがあつたが、かれはふかくこれを悔い、酒盃をうちこはして、終生、これを手にしなかつた。

は、元朝が衰へたのと、オスマン・トルコが西アジアに榮えたのと、この二つの理由で、ほとんど全くやんでしまつた。しかるに、明の中世頃から、西ヨーロッパの形勢が、しだいに、かはり、海路、印度にゆいて、世界の寶庫をさぐらうとする氣運が、だんだん起つた。その先鞭をつけたポルトガル人は、しきりに、アフリカ沿岸の探検と、その航路の發見とをつとめ、ヴァスコ・ダ・ガ



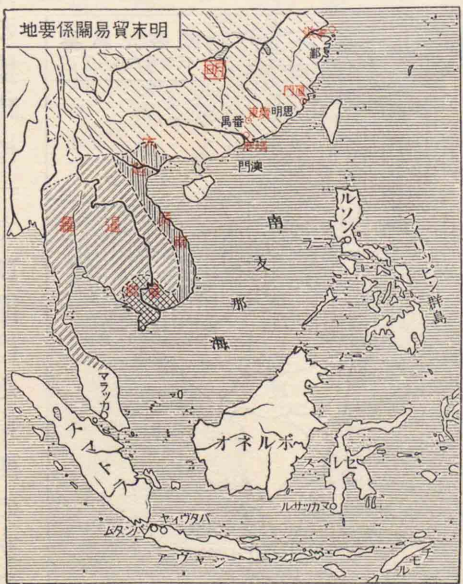
應仁亂後
二十一年

航
アフリカ周

ポルトガル
人の通商地

ポルトガル
人わが國に
來る

マに至つて、二一五八年〔明の孝宗の御代、後土〕に、アフリカの南端をまはり、遂に印度に達した。これは、モゴル帝國が建てられる前、二十八年のことである。これから、ポルトガル人は、相ついで印度に來航し、やがてゴアを取つて、そこに據り、しだいにセイロン島や印度の諸處に商館を設け、遂にはマラッカを略し、シヤム及びマライ群島と交易をひらき、さらに進んで廣東〔廣東省〕に至り、寧波〔浙江省〕、厦門〔福建省〕に商館をたて、また明から媽港〔澳門〕を租借して、これに據つた。ポルトガル人は、また二二〇三年〔明の世宗の世、後奈〕以來、わが日本にも來航して、貿易をいとなんだ。かくして、東方の物



應仁の亂
後十五年
前年北條
早雲伊豆
を取る

コロ
ンブス
の
ア
メリ
カ
の
發
見

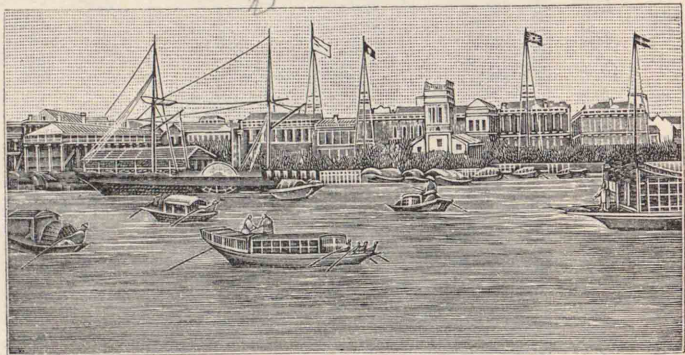
フイ
リッ
ピン
諸
島
の
發
見

イス
パ
ニ
ヤ
人
の
東
洋
貿
易

産が多く西ヨーロッパに輸送せられ、その貿易の巨利は、ポルトガル人の手に歸した。

イスパニヤ人の東航 これよりさき、二二〇三年〔明の世宗の世、後奈〕

年〔明の孝宗の御代、後土〕に、イタリヤ人コロンブスが、イスパニヤからトモツナの纜をといて、大西洋を西航し、アメリカを發見した。これから、イスパニヤは、アメリカのタクシヨクの拓殖に従ひ、二二八一年〔明の武宗の御代、後土〕には、さらにフイリッピン〔フィリピン〕諸島を發見して、四十四年の後に、セニヤウ〔セリヤウ〕を占領し、ついでマニラ市をたて、そこを根據として、明及びわが日本と通商しようとしたが、東洋貿易に於けるポルトガル人の勢力が、既に定まつてゐたので、イスパニヤ人の商業は、ただ



館商の人ルガトルボるけ於に東廣

明の使節
来る。秀
吉これを
逐ふ

オランダの
獨立

東印度會社
と東洋貿易

大阪落城
後四年

オランダ人
と日本

マニラとわが平戸にかぎられた。

オランダ人の東航

その頃、イスパニヤから分離して獨立を宣した

オランダも、また東洋貿易に著眼し、¹⁵⁹⁶二二五六年〔明天の神宗の慶長元年〕には、そ

の國人が、はじめてスマト

ラ・ジャヴァに來た。後六年、オラ

ンダ人は、東印度會社を起

し、政府の保護をうけて、東

洋貿易に従事し、軍艦・商船

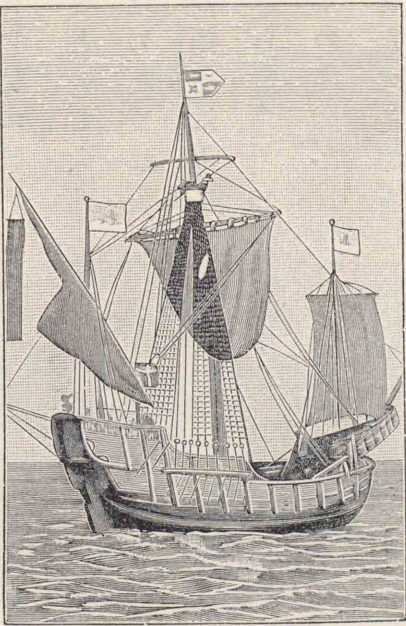
を派遣して、到る處で、ポル

トガル・イスパニヤの商船

を掠め、且、その植民地を奪ひ、¹⁶¹⁹二二七九年〔明天の神宗の元和五年〕、ジャヴァにバタ

ヴィヤ府をたてて、ここにその根據をかまへた。オランダ人は、またさ

きにわが平戸に來り、後には臺灣にも據り、盛んに貿易をいとなん



船のヤニバスイ

だ。
イギリス人の東航
二二六〇年〔明天の神宗の慶長五年〕に、東印度會社

を起して、東
洋に來たが、
ポルトガル
人及びオラ
ンダ人に妨
げられて、そ
の計畫、思ふ
にまかせず、
遂に印度に

退いて、専らこれが經營に當つた。その頃

この年關
ヶ原の役
あり

イギリス東
印度會社

イギリス東
印度會社

カルカッタ

マドラス

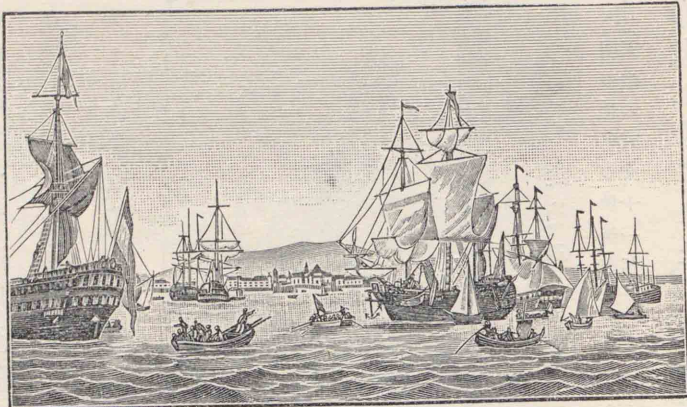
ニシムル

東印度會社

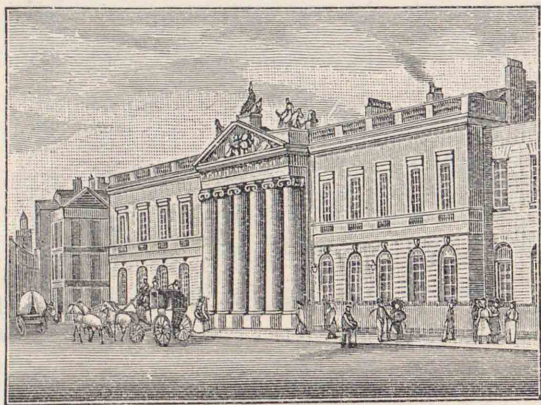
モルディブ

アウランゼブル

瓦使



景光の港ヤイヴタバ



社會度印東るけにンドンロ

キリスト東征
イスパニヤ

イスパニヤ

フランシスコ・サバテラ

二二〇三年

二二〇九

天主教

マテオリッチ

二二四〇

モゴル帝國
の衰微

ゼスイト教
團の東來

サヴィエル
日本に來る

マテオリッチ
チ支那に來る

印度のモゴル帝國には、アクバルの曾孫アウランゼブ〔清の聖祖〕が帝位にあつて、印度全體を領してゐたが、帝の死後、暗君が相ついで立つたので、帝國は遂に四分五裂し、その支配の及ぶ所は、わづかにデリー附近にかぎられた。それにつれて、印度に於けるイギリスの勢力は、だんだん増進した。



チリニオテマ

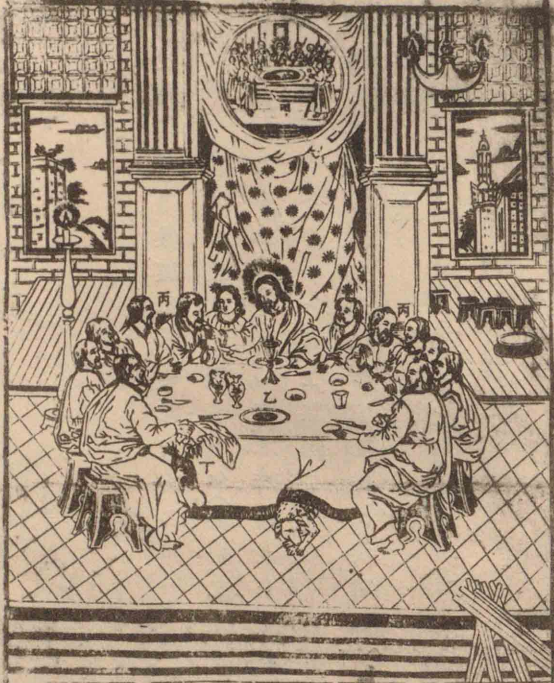
につとめた。その中で、イスパニヤ人フランシス・サヴィエルが、二二〇二年〔明の世宗の世、後奈良〕に、ゴアに來著し、後七年、わが日本に來て、各地に布教した。ことと、同派のイタリヤ人マテオリッチ〔利瑪〕が、二二四〇年〔神宗の世、

キリスト教の東來

右の如く、

西洋人がしきりに東來すると共に、キリスト教の舊派に屬するゼスイト教團〔天主〕の僧侶も、また東洋に來て、布教

立聖體大禮



耶穌基督の體
食す事ヲ示
當權已終而
世全功已竭矣
乙耶穌體是定
親就座持餅
及酒以食能
化成聖體聖血
永留在世以慰
宗徒及後世諸
奉教者
爾後從心而度
何事皆以我養
其神聖體
一耶穌亦曾受
其聖體之心
不除廢入其
心而存
見行 三

最後晩餐圖

これは東洋文庫所藏「出像經解」の一部である。「出像經解」は、アレニ Giulio Aleni の撰にかかり、毅宗の崇禎十年（皇紀二二九七年）に刊行された耶蘇繪傳ともいふべきもので、木版畫五十七葉から成り、畫中に説明がついてゐる。アレニは二二四二年頃、イタリヤに生れたゼスイト教團の宣教師で、支那に來て布教に従事し、艾儒略アヰルワと稱し、漢文の著書が多くある。

西洋學術の
輸入

正親町天皇（天正八年）媽港に來て、二十年間、南支那の布教に従事し、進んで北京に赴き、そこに教堂をたてて、多くの信徒を得たことは、共に世にいちじるしいのである。この前後に、續續、東來したキリスト教の宣教師は、いづれも學術に通じてゐたから、布教のかたはら、西洋學術書の翻譯等に盡力し、天文、地理、數學、曆法、砲術、測量術（測天術）等を傳へて、支那の新文明に多大の貢獻をなし、大いに官民からの敬愛をうけた。

概 括

近古期は、蒙古人の勃興した一八六〇年頃から、明の滅亡した二三〇〇年頃までの間で、わが第八十三代土御門天皇から第九代明正天皇に至る時代に當つてゐる。この期の特色は、蒙古人の勃興隆盛であつて、かれらは、ひろく東西の諸民族を伐ち従へ、その意氣ほとんど當時の世界を征服するかの如く見え、一時歐亞二大陸にまたがる空前の大帝國を建設した。しかるに、財政困難その他の原因によつて、國本の動搖を來し、遂に漢族の背叛を招き、結局蒙古人は、支那本部から驅逐されてしまひ、ここに漢族の明代となり、またまた漢文化の興隆を見るに至つた。さりながら、蒙古人の勢力は、なほ盛んなるものがあつて、中央アジアにチムールの大帝國が興り、その遠孫は、印度にモゴル帝國を起した。また、この期には、東西の大交通があつて、ヨーロッパ人東進の勢が、いよいよいちじるしくなり、それにともなつて、キリスト教が東流し、西洋の學藝も傳來した。

古

明

2028—2304

- 二二五八 (後土御門) 孝宗の時ヴァスコ・ダ・ガマ印度に達す
- 二二七〇 (後柏原) 武宗の時ポルトガル人ゴアを略取す
- 二二七七 (後柏原) 武宗の時ポルトガルの使節始めて明に來り通す
- 二二八六 (後柏原) 世宗の時バベル、モゴル帝國の基を開く
- 二二〇二 (後奈良) 世宗の時サウイエル、ゴアに來る
- 二二二六 (後奈良) 世宗の時アクバル大帝即位
- 二二二七 (後奈良) 世宗の時ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
- 二二二五 (正親町) 世宗の時イスパニヤ人フィリッピン諸島を占領す
- 二二三九 (正親町) 神宗の時イギリス人始めて印度に來る
- 二二四一 (正親町) 神宗の時マテオ・リッチ明に來る
- 二二四三 (正親町) 神宗の時滿洲のヌルハチ兵を起す
- 二二五二 (後陽成) 神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ
- 二二五五 (後陽成) 神宗の時オランダ人始めて印度に航す
- 二二六〇 (後陽成) 神宗の時イギリス人東印度會社を建つ
- 二二七六 (後水尾) 神宗の時ヌルハチ帝位に即く
- 二二七九 (後水尾) 神宗の時オランダ人バタヴィヤに據る
- 二二八四 (後水尾) 熹宗の時オランダ人臺灣を占領す
- 二二八七 (後水尾) 熹宗の時清の太宗朝鮮を征伐す
- 二二九一 (明 正) 李自成亂を作す
- 二二九六 (明 正) 清の太宗國號を清と改む
- 二三〇四 (後光明) 李自成北京を陥れ明亡ぶ

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代	王朝	年代	(天皇)	重なる事蹟
近	(元) 蒙古	1866—2028		
		1866—2028		
古	明	2028—2304		
		2028—2304		
		二〇二八	(後龜山)	朱元璋帝位に即き明の太祖となる
		二〇二九	(後龜山)	太祖の時チムール、中央アジアを定む
		二〇五〇	(後龜山)	太祖の時チムール、キプチャク汗を破る
		二〇五二	(後龜山)	太祖の時李成桂朝鮮王となる
		二〇五九	(後小松)	惠帝の時燕王兵を擧ぐ
		二〇六二	(後小松)	成祖の即位。アングラの戦(チムール、オスマントルコを破る)
		二一五八	(後土御門)	孝宗の時ヴァスコ・ダ・ガマ印度に達す
		二二七〇	(後柏原)	武宗の時ポルトガル人ゴアを略取す
		二二七七	(後柏原)	武宗の時ポルトガルの使節始めて明に來り通ず
		二二八六	(後柏原)	世宗の時パベル、モゴル帝國の基を開く
		二二九〇	(後奈良)	世宗の時サヴィエル、ゴアに來る
		二二九一	(後奈良)	世宗の時アクバル大帝即位
		二二九六	(後奈良)	世宗の時ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
		二二九七	(後奈良)	世宗の時イスパニヤ人フイリッピン諸島を占領す
		二二九五	(正親町)	世宗の時イギリス人始めて印度に來る
		二二三九	(正親町)	神宗の時イギリス人始めて印度に來る
		二二三九	(正親町)	神宗の時イギリス人始めて印度に來る
		二二四一	(正親町)	神宗の時マテオ・リッチ明に來る
		二二四三	(正親町)	神宗の時滿洲のヌルハチ兵を起す
		二二五二	(後陽成)	神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ
		二二五二	(後陽成)	神宗の時オランダ人始めて印度に航す
		二二五五	(後陽成)	神宗の時イギリス人東印度會社を建つ
		二二六〇	(後陽成)	神宗の時イギリス人東印度會社を建つ

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代	王	朝	年代	(天皇)	重なる事蹟
古	蒙	元	1866—2028	(元)	
近	古	蒙	1866—2028	(元)	
古	明	2028—2304			
二〇二八	(後龜山)	朱元璋帝位に即き明の太祖となる			
二〇二九	(後龜山)	太祖の時チムール、中央アジアを定む			
二〇五〇	(後龜山)	太祖の時チムール、キプチャク汗を破る			
二〇五二	(後龜山)	太祖の時李成桂朝鮮王となる			
二〇五九	(後小松)	惠帝の時燕王兵を擧ぐ			
二〇六二	(後小松)	成祖の即位。アングラの戦(チムール、オスマントルコを破る)			
二一五八	(後土御門)	孝宗の時ヴァスコ・ダ・ガマ印度に達す			
二一七〇	(後柏原)	武宗の時ポルトガル人ゴアを略取す			
二一七七	(後柏原)	武宗の時ポルトガルの使節始めて明に來り通ず			
二一八六	(後柏原)	世宗の時バベル、モゴル帝國の基を開く			
二二〇二	(後奈良)	世宗の時サヴィエル、ゴアに來る			
二二一六	(後奈良)	世宗の時アケバル大帝即位			
二二一七	(後奈良)	世宗の時ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる			
二二二五	(正親町)	世宗の時イスパニヤ人フイリッピン諸島を占領す			
二二二九	(正親町)	神宗の時イギリス人始めて印度に來る			
二二四一	(正親町)	神宗の時マテオ・リッチ明に來る			
二二四三	(正親町)	神宗の時滿洲のヌルハチ兵を起す			
二二五二	(後陽成)	神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ			
二二五五	(後陽成)	神宗の時オランダ人始めて印度に航す			
二二六〇	(後陽成)	神宗の時イギリス人東印度會社を建つ			
二二七六	(後水尾)	神宗の時ヌルハチ帝位に即く			
二二七九	(後水尾)	神宗の時オランダ人バタヴィヤに據る			
二二八四	(後水尾)	熹宗の時清の太宗朝鮮を征伐す			
二二八七	(後水尾)	熹宗の時清の太宗朝鮮を征伐す			
二二九一	(明正)	李自成亂を作す			
二二九六	(明正)	清の太宗國號を清と改む			
二三〇四	(後光明)	李自成北京を陥れ明亡ぶ			

前三年徳川家光征夷大將軍に任ぜらる

朝鮮征伐

明への侵入
内蒙古平定

朝鮮再征

第四篇 近世

第一章 清の統一

太宗の業

後金の太祖は、二二八六年〔明天の熹宗の寛永三年、後水尾〕に死んで、その子太宗が立ち、やがて兵を發して、朝鮮を伐つた。朝鮮は、さきに明か



李自成の北京を掠

ら援けられたのを恩とし、これになびいてゐたが、遂に和を太宗に請うた。太宗は、ついで、みづから將となつて、明を攻め、さらにまた内蒙古を平げ、二二九六年〔明天正徳川家光の御代〕、國號を清シンとあらため、翌年、再び朝鮮を征して、明と絶たしめ、且、清の封冊を受けさせた。

後七年由
井正雪の
隠謀露顯
す

女子用 新編東洋史

一六

明の滅亡

清北京に遷
都す

鄭成功の孤
忠

世祖の業

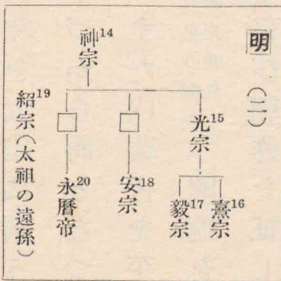
太宗の子世祖は、二三〇四年〔後光明天〕に、また兵を出して、明に攻めよせた。明では吳三桂をしてこれをふせがせたが、たまたま流賊李自成が北京をおとし、呉三桂は清軍をむかへて降参し、ともに李自成を伐つて、これを走らせた。かくて、世祖は、難なく支那の北部を定め、都を北京にうつし、ついで、滿洲の風俗に従はせた。



鄭成功

明の遺臣

明の遺臣たちは、なほその王族を擁し、江南諸處に兵を擧げたが、結局、みな敗れ、清は、遂に支那を一統した。ひとり鄭成功のみは、孤忠を守つて屈せず、力をつくして、明の恢



明の遺臣わ
が國に歸化
す

復をはかり、後、臺灣に渡り、オランダ人を島外に逐つて、これを占領し、依然、清軍に抗した。また明の遺臣の中には、清につかへることをいさぎよしとせず、海を渡つて、わが日本に來朝、歸化したものもあつた。朱之瑜〔水舜〕及び僧隱元等は、即ちそれである。

◇鄭成功 鄭成功の父鄭芝龍は、かつてわが平戸に來り寓し、田川氏を娶つて、一子を擧げた。それが明朝復興のため、最後の活躍をした成功である。成功は、歸國の後、母をむかへて、孝養、甚だつとめたが、明軍が清軍と戦つて敗れた時、田川氏は、城樓より河水に身を投じて死し、烈女の名をのこした。清兵は、田川氏の死に感じ、婦女すら、なほこの通りである。倭人の勇氣、知るに足るといつたといふことである。また成功は、明の王族から、その姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれてゐる。

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉

聖祖の業

清の聖祖〔世子〕は、清朝の基をかため成した大英主である。帝は、康熙帝〔年號〕とも稱し、わが徳川時代の全盛期を通じ、六十

三藩の由来



聖祖

餘年の久しい間位にあつて、文勳武功共にいちじるしい。この頃、雲南に吳三桂、福建に耿精忠、廣東に尚之信といふものがあつた。この三人は、いづれも明の降將またはその子孫で、それぞれ廣大な領地をもち、その上、兵權をもにぎり、三藩と稱して、ほとんど半獨立の姿をなしてゐた。聖祖は、三藩の強大なるを憂へ、その處置について、心をなやまし、遂に英斷を以てこれを撤廢しようとした。三藩は、これを知つて、不安を感じ、二二二三年〔靈元天皇の御代〕、吳三桂が、まづ兵を擧げて反し、ついで、他の二藩も、これに應じた。かねて清室に心服しない漢人等は、きそつてこれに與し、あはや、清朝の基礎も動くかと思はれる形勢であつたが、非常な苦戦を重ねて、清軍は、遂にこれを鎮定した。これよりさき、臺灣の鄭成

この頃徳川家綱將軍たり

三藩の亂

臺灣の鄭氏

臺灣服屬 聖祖の外征

功は、既に死んで、その子をへて、その孫が、なほ臺南に據り、父祖の志を守つてゐた。聖祖は、三藩の亂を平げた後、これを攻め降して、臺灣を取り、ついで親征して、外蒙古を併せ、また青海地方をなびかせ、さらにチベットをも従へた。

◆三藩の亂について 「此時に吳三桂は既に七十以上の老人であつたが、其反亂は清朝に非常な打撃を與へたものである。中略清朝では勿論大軍を擧げて防いだ、が、其時には既に明を取る時に大變に骨を折つた皇族や大將などは大部分亡くなつた人が多かったので、逆も敵する程の名將は無かつたと云ふことで、それで清朝の兵の見苦しかつたことは非常なものである。能く吳三桂の兵に遭つては逃げ廻はつて居つたのであるが、然るにどうして其亂が平らいだかと云ふと、吳三桂は餘り年を取つて居つて、軍事にあまり慣れ過ぎて居つた。慣れ過ぎると大事を取り過ぎる。中略其時に康熙帝は僅か年が十九か二十であつたが、若い時から鋭敏で且つ大變な精力家であつて、一日に八方から來る軍事の報告は自分一人で眼を通して大臣を側に置いて斯う云ふ方針にしろ、斯う云ふ方針にしろと云ふ風に、一々皆口授をして朝から晩まで凡そ三四百通の奏疏に可否を決してやつて兵事を指揮して居つた。それで兵は弱くて屢々

前年足利義輝將軍となる

モスコの獨立
ロシア人の東進

この頃徳川綱吉將軍たり

ネルチンスク條約



高宗

逃けるが、防備配置の手順が良かったので、大敗に至らない中に吳三桂は老死したので、此の大亂を甘く征伐し終つた。(内藤虎次郎氏著清朝衰亡論)

ロシア人の東進 またロシアでは、明の中世頃に、モスコイ大侯がキプチャク國をうちほろぼし、¹⁵⁴⁷二二〇七年〔明の世宗の御代〕はじめてロシア皇帝と稱した。これから、ロシア人は、しだいに東進して、シベリヤを略し、明末以來、滿洲北部にあらはれ、清代に至つては、しばしばこれと境界上の争をひき起した。よ

つて、聖祖は、ロシアに交渉し、¹⁶⁸⁹二二四九年〔東山天皇の元祿二年〕、ネルチンスク條約を結び、外興安嶺及びアルグン河を以て兩國の境界と定め、ロシア人の南下をくひとめた。

高宗の業

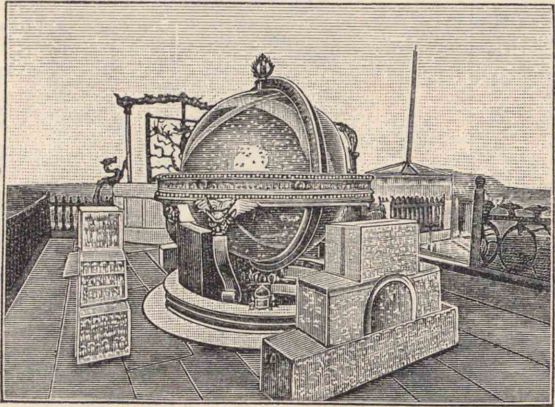
聖祖の孫高宗は、乾

高宗の晩年に徳川家齊將軍となる

高宗の英明
外征

康熙乾隆二代の極盛

大部の書籍發行



儀體天たつ造がトスービルエフ

隆帝〔乾隆は〕とも稱し、その在位の長きこと、ほとんど聖祖に同じく、英明なることも、聖祖についてゐる。帝は、天山南北兩路を定め、バル

マを攻め降し、シム安南等と共に、それぞれ清の封册を受けさせ、またネパールをも伐つて、これを降した。これで清の領土は、漢唐の盛時にもまさつて廣大となつた。

清の極盛

かくの如く、康熙乾隆二帝の時代は、國威が大いに外にあがつた上に、内に於ても、もろもろの制度がととのつて、政治がよくゆきとどき、學術の研究も、また大いに進み、康熙字典

をはじめとして、大部の有益な書物が、續續刊行された。康熙帝は、ま

フェルビースト信任

た西洋の學術にも注意し、ベルギーの宣教師フェルビースト〔南懷〕を信任し、これを北京の觀象臺副長とした。

◆フェルビースト フェルビーストは、世祖の末年に支那に來たゼスイト教團の宣教師

である。かれは、聖祖につかへて、その信任をうけ、帝

に哲學、數學、物理學などを進講し、三藩の亂の時に

は、大小の砲を鑄て功があつたが、二三四七年徳川

綱吉が生類憐みの令を發した年、病にかかり、翌年、遂に北京で死んだ。天文、地理に關する著書が多くある。

2276

清(一)

太祖¹ 太宗² 世祖³ 聖祖⁴ 世宗⁵ 高宗⁶

第三章 鴉片の役

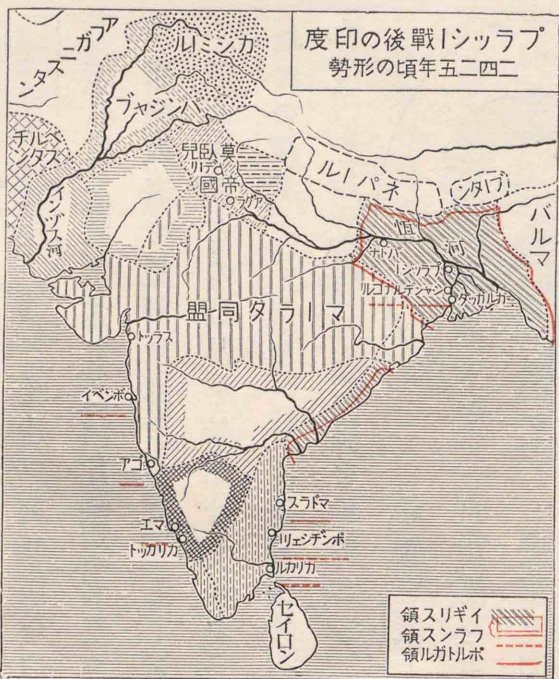
イギリス人の印度經略と戰役の原因

イギリス人は、明末以來、マドラスを根據として、印度經略の事に當り、しだいにポルトガル人及びオランダ人を壓倒し、乾隆の頃には、フランス人との競争にも勝つた。かくして、イギリス東印度會社は、著著、その勢力を印度に植ゑつ

印度經略の成功

イギリス人の支那貿易と阿片輸入の結果

鴉片輸入の禁



シラフの戦いは一七四二年に起り、イギリス人は、この戦いで、印度の領土を擴大し、英國の勢力を印度に植ゑた。

け、進んで支那貿易の擴張をもはかり、清國政府の特許を得て、盛んに印度に産する鴉片を廣東に輸入した。清國人は、大いに鴉片をこのんで、その心身を害し、經濟上にも、また甚だ憂ふべきものがあつたから、清國政府は、たびたび嚴令を下して、これが輸入を禁じた。しかなかなか容易に行はれず、かへつて、ますます密輸入を盛んにし、高宗の孫宣宗の時には、總額三萬餘函の多きにのぼつた。そこで、宣宗は、林則徐を廣東に

林則徐の處置

清 (二)

高宗⁶—仁宗⁷—宣宗⁸—文宗⁹—穆宗¹⁰

遣はして、斷然たる處置をなさしめ、イギリス人の密藏してゐた鴉片二萬餘函を沒收して、これを焼きすて、且、阿片喫煙者及びその密輸入者を嚴刑に處することとし、遂にイギリス人との貿易を禁止せしめた。

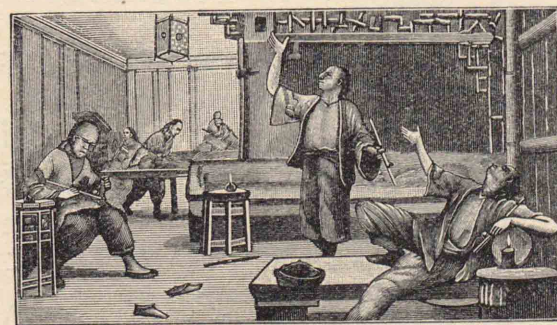
イギリスの態度

イギリスでは、貿易保護のため、いよいよ起つて、清國を伐つこととし、船艦を派して、舟山島を占領し、廣東廈門寧波等を封鎖攻撃させ、別に艦隊をすすめて、渤海灣に入り、白河口に迫らせ、ついで、廣東を占領し、廈門

イギリス軍の連勝



林則徐



鴉片喫煙所内部の景光

南京條約

各國の通商條約締結

モゴル帝國滅亡

江戸幕府外國船打拂令を弛む

鎮海〔省内江〕寧波、上海、鎮江〔省内江蘇〕を陥れ、南京に攻めよせた。清國政府は、大いにおそれ、和を求め、遂に南京に於て和約を結び、償金〔約四十二萬圓〕を出し、香港を割譲し、上海、寧波、廈門、福州〔閩侯縣〕、廣東の五港を開くこととした。これが即ち清國の開國で、時は二五〇二年〔宣宗の十二年、仁孝天皇の天保十三年〕に當り、わが安政假條約の調印にさきだつこと十六年である。この後、清國と歐米諸國との間に、相ついで通商條約が結ばれ、國際關係はいよいよ密接してきた。

イギリス領印度 南京條約を結んでから後十五年〔バベルの建國から三百年〕に、イギリスは、モゴル帝國皇帝を廢し、



林則徐が鴉片を沒收する所

イギリス王
印度皇帝と
なる

ついで東印度會社の政權を收めた。そして、二五三七年（清の徳宗の世、明治十年）になると、女王ヴィクトリヤが、印度皇帝の位を兼ねることとなり、その九年の後に、全くバルマを併せて、印度の一州とした。

第四章 長髮賊 英佛軍の侵入

長髮賊

清は、鴉片の役にもろくも敗れて、大いに威信を内外に



洪秀全

洪秀全廣西
に起る

墜したので、洪秀全が、これに乗じて、兵を廣西に擧げた。洪秀全は、滅



洪秀全が玉璽

後二年ベ
リ浦賀
に来る

賊名の由来



曾國藩

滿興漢をとなへて、漢人の心を取り、またキリスト教を利用して、外人の意を迎へ、二五一年（明天宗の咸豐元年、孝）國號をたて、太平天國と稱し、みづから天王と號した。世にこれを長髮賊（Changfa Zei）といつてゐる。

洪秀全南京
に據る

曾國藩李鴻
章義勇兵を
起す

る。これは、その一味のものが、清の風俗にそむいて、辮髪をやめ、すべて髪を長くのばして、結びあげることとしたからである。
賊勢 洪秀全は、破竹の勢を以て、江南を席卷し、南京を取つて、これに據り、進んで江北をも侵した。やがて、曾國藩、李鴻章等の



曾國藩の祠の一部

も曾國藩の邸で、湖南省長沙にある。この建物は、今は女學校となつて、曾國藩の孫女がこれを經營してゐる。



李 鴻 章

名士が、相共に義勇兵をおこし、賊軍を伐つて、これを破つたが、たまたま清國とイギリス・フランス二國との間に紛議が起つて、清國政府は、大いに苦しんだ。

◇會國藩の人物 會國藩は、湖南省の人

で、二四六九年仁宗の嘉慶十四年に生まる。文武の才を兼ね備へた近世の大人物で、奉公の精神に富み、常に意を修養に用ひて怠らず、勤儉みづから持し、勞苦に習ひ、早起をたふとび、克己を工夫してゐた。

紛議の原因

英佛軍の侵入

この紛議の原因は、廣東の清國官吏が、イギリスの國旗を立てた商船内にはいつて、有罪イウツガイのうたがひある清國人をとらへたことと、廣西に於て、清國人がフランスの宣教師を殺害したこととにある。この二件に關する清國政府の處置が、宜ヨロしきを得な

英佛軍の連勝

ロシア公使の調停

北京條約

賊勢再振
洋槍隊成る



フエチナグイ

かつたので、イギリス・フランスの聯合軍は、廣東を攻めおとし、進んで白河ハクカにはいつた。清國政府は、内亂のために、力を外事に専らにすることが出来ず、あわてて和を講じたが、たちまちまた破れ、聯合軍は、遂に北京に侵入して、これをおとし、入れた。たまたまロシアの公使イグナチエフが起つて、その間には、いりたくみに兩者の和議を周旋シュウセンした。それで、清國は、イギリス・フランスと北京條約をむすび、償金を出し、キリスト教をひろ

めることを承認し、且、牛莊漢口ニウチュウハン〔湖北省〕以下七港を開く等のことを約した。時に二五二〇年〔文宗の咸豐十年、孝〕である。

長髮賊の平定

この外患に乗じて、長髮賊は、一層、勢をたかめた。上海在留の外國人等は、北京條約の成つた後、洋槍隊を組織して、これ

この年櫻田の變あり

ゴルドンの功

に當ることとし、ついで、イギリス人ゴルドンを推して、その將とした。ゴルドンは、よく兵を用ひ、李鴻章等と力をあはせて、しばしば奇勝を



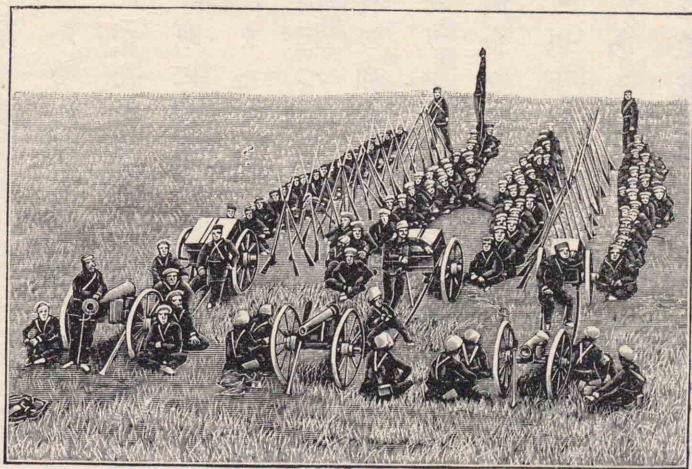
ゴルドン

制した。この頃に至つて、官軍も、またしだい

に勢を得、遂に大舉して、南京をかこみ、¹⁸⁶⁴二五二四年〔穆宗の世、孝明天皇元治元年〕、これをおとし、¹⁸⁶⁴れて、洪秀全をたふし、十五年にわたつた大亂も、ここに全く定まつ

南京陥落と兵亂鎮定

長州征伐はじまる



洋槍隊

た。

◇ゴルドンの人物　ゴルドンは、イギリスの工兵士官である。二五二三年以來洋槍隊の將となり、十六箇月の間に、三十三戰を重ね、赫赫たる武功をたてた。清國政府は、その功勞にむくいるために、多額の金を贈つたが、ゴルドンは、かたく辭して、一錢をも受けなかつた。その故郷への通信の一節に、余は支那に來た時と同じく、貧困で支那を去つたと書き送つたといふことである。まことに世にめづらしい高潔の人といふべきである。

第五章　ロシアの滿洲及び中央アジア經略

ロシアの東略

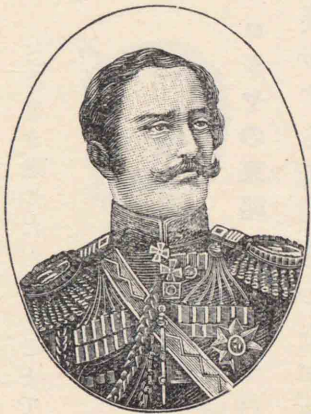
ロシアは、ネルチンスク條約によつて、一時、清國に讓步する所があつたが、その後、久しからずして、カムチャッカをとり、ついでアラスカを略し、樺太カラフトをおかし、千島及び蝦夷にもあだして、わが江戸幕府を驚かした。また東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは、清國が、長髮賊の内亂と、イギリス・フランスの外患とにくるしんでゐ

カムチャッカその他の略取

愛瑠條約

女子用 新編東洋史

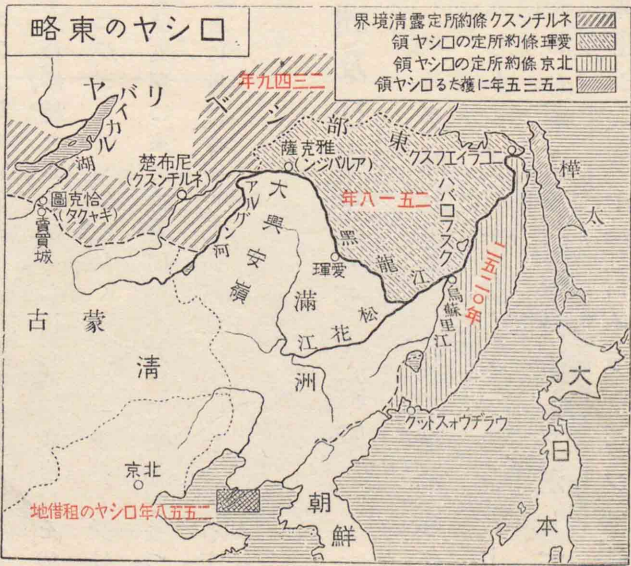
るのに乗じ、境界改正の事をこれに迫り、三五一八年〔清の文宗の安政の五年、孝明、愛瑠條約を結び、黒龍江を以てその境界とした。ついて、ロシアは、



フヨウハラム

イグナチエフの講和周旋の功を利用し、清國をして烏蘇里江東の地を割かせ、やがて、その南端にウラヂウオストックをたて、これを極東に於けるロシアの根據地

烏蘇里江東
割取

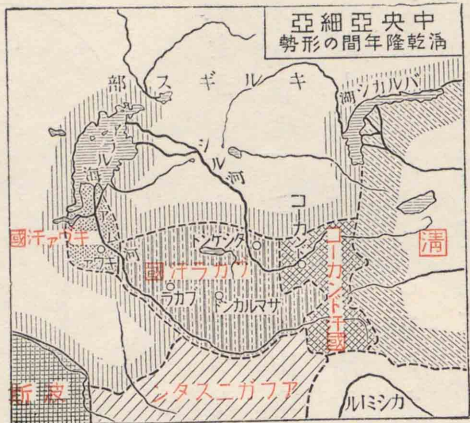


端にウラヂウオストックをたて、これを極東に於けるロシアの根據地

千島樺太交
換

中央アジア
の三汗國

三汗國の末
路



とし、後さらに千島を日本にゆづつて、樺太全島をその有とし、ほとんど全く北部アジアの地をその手ににぎつた。

ロシアの中央アジア侵略

またロシア

は、中央アジアを占領して、印度洋方面に進出しようとはかつた。中央アジアは、チムールの死後、興敗つねなく、明の中世以来、キヴァ・ブカラ・コーカンドの三汗國に分れて、相争つてゐた。ロシアは、はやく大遠征隊を派遣して、キルギス及びキヴァ地方の探検をこころみさせ、遂に全くキルギス種族を従へて、キヴァに接近し、二五二八年〔清の穆宗の光緒の四年、1898〕以後、ますますその侵略の歩を進め、相

回教徒の亂

ロシアのイ
リ占領
清國天山南
路を平ぐ



族スギルキ

議をかもすやうになつた。

イリ事件

この頃、天山南路の回教徒が亂を起し、イリ〔伊犁〕地方の回教徒も、これに應じて動搖ドクモウした。すると、ロシアは、國境を安んずるためと稱し、二五三一年〔清の穆宗の世、明治四年〕、兵を出して、イリを占領した。清國では、まづ天山南路を平げ、然る後、ロシアに向つて、イリの返還

ロシアの領域は、南、アフガニスタンに接し、東、山嶺をへだてて、支那と對し、しぜん、イギリス及び清國と紛



隊征遠のヤシロるけ於にヤジア央中



兒二のそと人美のラカブ

ブカラ婦人の風俗を見るべし

事件の落著

下
ロシヤの南

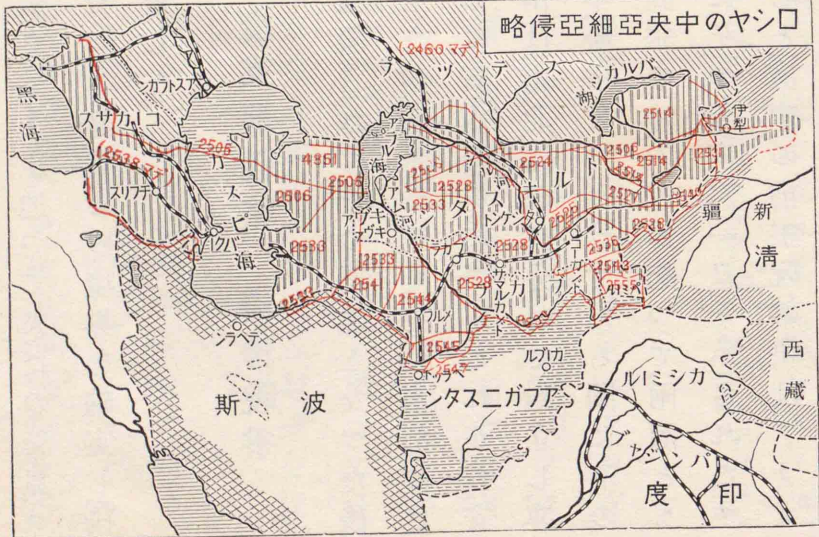
イギリスの
對策

を求めた。ロシヤは、言を左右に託^{タテ}して、これに應ぜず、兩國間の平和は、今にも破れようとしたが、結局、雙方、たがひに譲^ユりあひ、二五四年1851年〔清の徳宗の世、明治十四年〕、清國は、償金を出し、ロシヤは、コルゴス河〔イリ河の枝河〕以東の地を清國に還付して、その局を結んだ。

イギリス、ロシヤの紛議

この後、まもなくメルフをとり、進んでアフガニスタンにはいつた。イギリスは、さきにアフガニスタンを保護國として、ロシヤに當る

略侵亞細亞中のヤシロ



二一八八
三五五
パミール
題並にその
境界確定

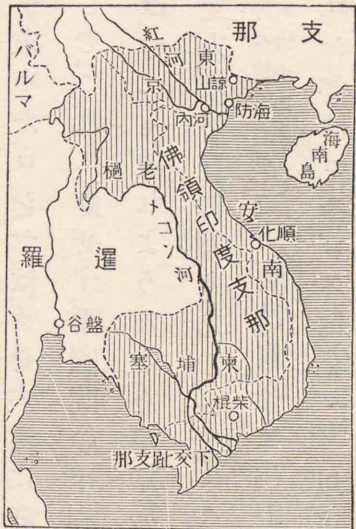
こととしたが、今や、その南進の勢がますます迫つて來たのを見、ロシヤと協議して、ロシヤ領とアフガニスタンとの境界を確定し、後またパミール地方の境界をも議定した。

第六章 フランスの印度支那經略 清佛戰爭

大越と廣南

越南の建國 安南は、明の成祖に征服されて、その屬地となつた後、ほどなく獨立して、國を大越と號したが、明末に至り、その南部に、さらに廣南國が起つた。これから、安南は、南北兩部に分れて對立し、連年、紛争をつづけてゐる間に、清の高宗の時、内亂が起つて、兩國ともに、その王室が、一旦たふされた。すると、廣南の前王阮福映は、フラン

阮福映の一統



ス人の援をかりて、恢復をはかり、遂に一統の業をなし、都をユエ(化順)にさだめ、國號をたてて、越南と稱した。時に二四六二年〔清の仁宗の世、光緒八年〕で、越南は、やがて清の封冊をうけた。

蝦夷奉行
を函館奉
行と改む

越南

フランスと
越南との紛
争

フランス、
カンボヂヤ
を保護國と
なす

フランス越
南を保護國
となす

清國の抗議
海陸の勝敗

フランスの印度支那經略 越南は、一統後、かへつてフランス人を喜ばず、遂にその宣教師を虐待したので、二五〇八年〔清の文宗の世、孝明天皇の安政五年〕、フランスは、兵を出して、サイゴン(梹榔)を占領し、後四年、越南をしてその南部を割かせ、且、償金を徴して、和を結んだ。ついで、フランスは、カンボヂヤ(柬埔寨)を保護國とし、二五〇三年〔清の徳宗の世、明治十六年〕、また越南と戦つて、その國都をおとし、いれ、ことごとく東京地方を讓與させ、且、越南を保護國とした。

清佛戰爭 しかるに、清國は、越南王がかつてその封冊を受けたのを口實とし、この講和に異議をとなへて、二五〇四年〔明治十年〕、フランスと開戦した。この役、フランスの海軍は、清國艦隊を破り、澎湖島を占

和約

領し、臺灣の諸港を封鎖した。ただし、越南北境の陸戦に於ては、清軍の勢が盛んであつて、フランス軍は、かへつて苦戦したが、翌一八八五年、兩國間に和約が成りたち、清國は、越南に對する權利を放棄し、且、東京のフランス領なることを承認し、遂に今のフランス領印度支那の成立を見るに至つた。

フランス、メコン河東の地を取る

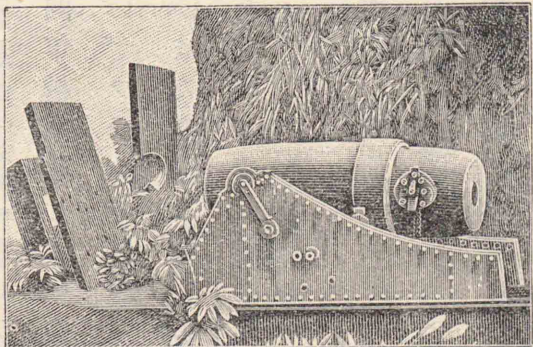
フランスとシムとの交渉

フランスは、また

シムをおびやかして、メコン河東の地を取つた。この頃、既にメコン河上流地方を領してゐたイギリスは、これに對して異議をと

イギリスとの協商

なへ、兩國領地の境界に幅五十英里の中立地帯を設けることとした。これから、シムは、イギリス・フランス二勢力の間にはさまり、わづ



清軍敗殘の遺址

光緒十年六月十五日、明治十七年八月四日、佛國軍艦九隻、基隆港を攻撃し、砲臺數處を陥れ、沙洲から上陸した。八月十七日、佛艦十三隻、また來り犯し、大いに清軍を破つて、遂に基隆を占領した。本圖は、二沙洲に於ける海岸砲臺が破壊された敗殘の光景を示す。

かにその國家の存立を保つことを得るといふおぼつかないありさまとなつた。

第七章 清國と歐米列強との關係 清の滅亡

支那共和國の建設

清國の衰勢

列強の壓迫

清國は、内外の多事に苦しんで、國運が、だんだんかたむいたが、明治二十七八年の日清の役に、遺憾なくその弱點を暴露した。列強は、これに乗じて、にはかにその壓迫をたくましくし、わづか數年の間に、ドイツは膠州灣を、ロシアは大連灣地方と旅順口とを、イギリスは威海衛を、フランスは廣州灣を租借した。その頃、アメリカ合衆國も、ハワイを併合し、またイスパニヤと戦つて、フィリピン諸島を併せ、しだいに力を東洋及び南洋方面にのばさうとして來たから、清國は、あたかも爪牙をみがける猛獸につつまれたと同様

米國の勢力伸張

列強の租借

國政革新の企圖
西太后の政策
義和團蜂起
聯合軍の救援
講和
ロシアの經營

の姿となつた。

北清事變 時の清國皇帝德宗は、熱心、國勢をもりかへすことをつとめ、康有爲を用ひて、政治の革新をはかつた。しかるに、西太后が政をきくこととなり、改革黨をしりぞけて、専ら保守、排外を事としたので、西教撲滅、外人排斥を目的としてゐる義和團といふ暴徒が、この機に乗じて、山東省に起り、^{1900年}〔明治三十三〕北京に亂入して、列國公使館を圍んだ。そこで、日英米佛露獨埃伊諸國は、相聯合して兵を出し、遂に北京を攻めおとし入れて、各國公使以下をすくつた。この騒亂の間に、德宗と西太后とは、難を西安府〔陝西省〕にさけ、李鴻章等をして列國と和を講ぜしめ、償金を出し、且、罪を謝して、その局を結んだ。

日露の役と韓國併合 この事變に際して、兵を滿洲に入れたロシアは、事定まつて後も、容易にこれを引きあげず、かへつて、ますますそ



西太后

西太后は、文宗の妃で、穆宗の生母である。文宗の死後、およそ五十年の間、國政に關與し、内外多事の際に處して、よく人材をすべ、政治家的才略を發揮したので有名である。圖の上部に横書してある文字は、その尊號である。

日英同盟

韓國併合

日露の役

の經營の歩を進め、さらに手を韓國にまで伸ばした。たまたま¹⁹⁰²二五六年〔明治三十五年〕に、清韓二國の領土保全及び東洋平和を目的とした日英同盟が成り立つたので、ロシアもいささかこれに憚^{ハバカ}る所があつて、滿洲から撤^{テツ}兵^{ヘイ}すべきことを清國に約束した。しかるに、ロシアは、誠實にその約束を履行^{リカフ}せず、日本と明治三十七八年の役をひき起し、かへつて大敗した。その結果、旅順口及び大連灣地方に對するロシアの租借權は、日本に讓與され、韓國は、また日本の保護國とな



牌門念記林德克

義和團の亂に、ドイツ公使男爵フォン・ケットレルが殺された。清國は、償金の外に、ドイツ公使が命をおとした地點に、その事蹟を記した露罪の克復林記念門牌を稱するものを建設することになり、これを實行した。

清國の自覺

り、後五年、遂に併合された。

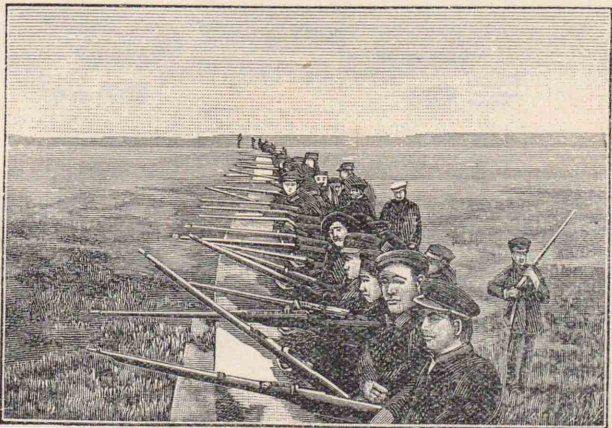
清室の滅亡 義和團の亂後、清國は、ますますめざまめて、日本その他の國國に多數の留學生を派遣し、これが文物制度を學ばせた。二五六年〔明治四十四年〕¹⁹⁰⁸



Sun Yat Sen

文 孫

西 太 后 及 び 德 宗 相 がついて



軍 命 革

宣統帝立つ

死に、幼年の宣統帝が立つたが、當路の人人は、銳意、國政の改良につとめ、日本にならつて、立憲政治を行はうとした。しかるに、滿洲政府に對して、

革命軍勃發

宣統帝退位

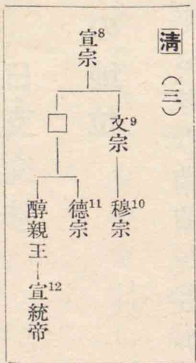
不平をいだいてゐる革命派が、二五七年〔明治四十一年〕十月、急に兵を武昌に擧げると、その影響は、すみやかに四方に波及して、たちまち全國的の動亂となつた。清廷は、急遽、袁世凱を總理大臣に任じて、時局を始末させようとしたが、事、既におそく、翌年二月、宣統帝は、遂に帝位を退くこととなり、滿人の壯烈な決戦も、執拗な反抗もなく、清朝は、もろくも亡びてしまつた。清は、



凱 世 袁

太祖の即位から、ここに至るまで、十二代二百九十七年である。

支那共和國 この前年、革命派は、南京に據つて、中華民國新政府を組織した。をりしも、イギリスより歸り來り、衆に推されて、



2572

孫文臨時大總統となる
袁世凱假大總統となる

支那共和國
成立

臨時大總統となつた孫文〔逸仙と〕は、今や清帝が退位したので、その地位を辭した。それで、袁世凱がこれに代り、假大總統の任に就いて、北京に新政府を立てたが、そのなす所、必ずしも革命派の満足する所とならず、第二の革命が、また勃發した。しかるに、袁世凱は、たちまちこの動亂を鎮定し、二五七年〔大正〕國會に推されて、正式の大總統となり、ここにはじめて支那共和國が成立し、やがて列國の承認を得た。

第八章 共和國建設後の支那 日支交渉

東洋の現勢と我が國の地位

帝政運動

袁世凱は、既に大總統に當選したが、野心滿滿たるかれは、これを以て満足せず、さらに帝政を再興し、みづから帝位に即くべきことを宣言した。舊革命黨員等は、これを憤り、討袁の旗を雲南

袁世凱の帝
政宣言と討
袁軍

帝政宣言取
消と袁世凱
の死

黎元洪の大
總統

にかかげ、諸省の應援を得て、その勢が、日に盛んになつた。袁世凱は、形勢の不利なのを見、その帝政宣言を取消したが、人心が容易に定まらないので、二五六年〔大正〕六月、憂悶して病死した。それで副總統黎元洪が、これに代つて大總統となり、帝政をとなへたものを罰し、一時、平和となつた。

日獨開戦と日支交渉

これよりさき、二五四年〔大正〕の七月に、ヨーロッパに大戦亂が起つた。日本は、東洋平和維持のために、ドイツに對して、戦を宣し、十一月、青島を攻めおとし、膠州灣を占領した。また日本は、支那に於けるその地歩をかたくする目的を以て、翌年五月、日支條約を結び、支那をして遼東半島租借期限の延長〔ロシアが設

日獨開戦

日支條約

け、於ける日本の優越權、及び山東省に於けるドイツの權利を、日本に於て繼承し、將來、條件を附して、膠州灣地方等を支那に還付すべき